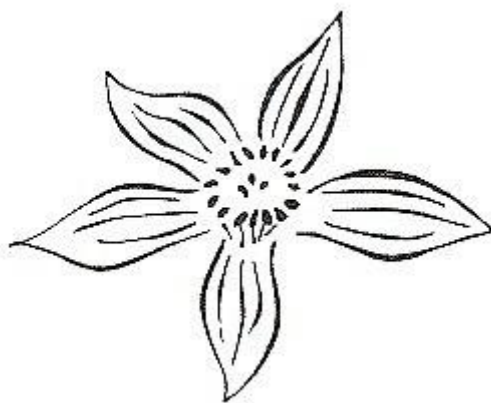


「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」

令和4年度研究開発実施報告書



愛媛県立三崎高等学校

## 巻頭言

愛媛県立三崎高等学校

校長 和田 俊之

本校は、四国最西端の地、愛媛県西宇和郡伊方町に位置し、伊方町唯一の県立高等学校であります。伊方町は、少子高齢化、地域活動の担い手不足等が深刻化しており、過疎化等の課題を抱えた地域となっています。また、本校生徒は卒業後、進学や就職を機に都市部へ転出する生徒が多く、地元に残り活躍する生徒の育成が不可欠になっています。

このような状況の中、本校では、平成27年度より、「地域を知る」「地域を愛する」ことをねらいとし、地域住民など地域側のニーズに応える形での地域活動や、地域全体を学びの場として捉えた地域課題の解決を目的とした探究活動を行ってきました。地域活動や探究活動を通して地域住民とのつながりを深める中での調整力やコミュニケーション力などの生きる力の育成に努めてきました。また、将来、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を地元を持ち帰って活躍する、生業・事業・産業を創出する「ブーメラン人材」の育成に取り組んできました。

平成31年度（令和元年度）より3年間、文部科学省から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定をいただき、これまで取り組んできた地域活動や探究活動等の学習内等をより進化させ、研究を行ってきました。具体的には、生徒の自主的な取組を活動の中心に据えながら、より高度な新カリキュラムの編成や組織編成に取り組み、「地域理解」「地域課題の発見・解決」「ブーメラン人材の育成」を3年間継続して行うことができる学校設定科目「未咲輝（みさき）学」の開設・運営を中心とした整備を行いました。また、組織づくりとしては町役場や地元NPO団体といった、地域に深く根差した団体に加え、県内外の大学等の教育機関にも参加していただき、地域の実態に即したコンソーシアムの編成も行ってきました。特に、本校の探究活動は、外部人材と関わりながら生徒自身が企画・実践を進めていくという特徴があり、学習を通して、計画力・判断力・実践力・調整力・コミュニケーション力について、生徒の成長に結び付けることができたと感じています。

令和4年度から令和6年度までの3年間、文部科学省から新たに指定をいただき、「新時代に対応した高等学校教育改革推進事業（普通科改革支援事業）」についての研究を進めています。この新事業では、令和6年度設置予定の地域社会学科（仮称）に向け、①変化の激しい社会を生き抜くことができる人材の育成 ②地域社会とつながる人材の育成 ③地域社会学を教育課程に位置付けたSTEAM教育・キャリア教育の推進を掲げています。学校と地域が連携し、「総合的な探究の時間」や学校設定科目「未咲輝学」の探究活動と各教科における地域連携を軸とした「地域社会とつながる授業」を連動させながら、教科等横断的な学習を行い、各教科の学習を社会生活と結び付けることや本校独自のSTEAM教育の積極的な導入により、これまで以上に生徒の学びの自走性を高め、生徒の進路希望に合った、一人一人に個別最適な学習が可能になると考えています。また、研究の中で、仮設の設定、検証（実証）を繰り返し、生徒の課題解決力・コミュニケーション力・調整力・論理的思考力・判断力・表現力・実践力・計画力など、「多面的に学び、考える力」を育成するとともに、新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」を身に付け、地域社会とつながることのできる新時代に対応した人材の育成につなげていきたいと考えています。

本報告書は、本事業1年目の研究成果をとりまとめたものです。本報告書を御高覧いただき、御教示いただきたいと存じます。最後になりましたが、本校の研究に御支援、御指導を賜りました関係者の皆様方に感謝申し上げ、挨拶といたします。

# 目 次

- 巻頭言
- 目次

I	概要	1
1	事業の概要	2
2	事業の目的等	4
3	実施体制	6
4	学際領域学科又は地域社会学科における取組	11
5	実施計画	15
6	成果の普及のための仕組み	19
7	研究開発概念図	20
8	ロジックモデル	21
II	組織の取組	23
1	過年度の取組	24
2	コンソーシアム	25
3	管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について	34
III	研究開発	36
1	事業の実績	37
2	みさこうSTEAM教育	41
(1)	学校設定科目「未咲輝学」	41
(2)	地域社会とつながる授業	42
(3)	教科等横断型授業	43
(4)	国外・県外フィールドワーク	44
(5)	マリンチャレンジプログラム	71
3	成果発表会（未咲輝-SENTAN-発表会）	88
IV	評価・分析	95
1	ループリック	96
2	目標と実施状況	97
3	次年度以降の課題及び改善点	97
4	成果概要図	98

# I 概要



※実施計画書（事業申請時のもの）

1 事業の概要

(1) 学際領域学科又は地域社会学科を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度
公立	愛媛県立三崎高等学校 (えひめけんりつみさきこうとうがっこう)	地域社会学科	令和6年度

(2) 学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	60名	学年制	未定

※課程別は、全日制・定時制・通信制の別を記載すること。

(既存の学科を転換する場合は、以下も記載)

現在の生徒数	現在の学科の種類	現在の学科の名称
140名	普通科	普通科

### (3) 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

各教科において、「地域社会とつながる授業」と地域連携を軸とした新たな「教科等横断型授業」の実施を二つの大きな柱として取り組み、本校独自のSTEAM教育を実践する。

- ・これまで「総合的な探究の時間」を中心に行ってきた探究活動を、教科等横断的に行い、各教科の学習を実社会と結び付けることで、これまで以上に生徒の学びの自走性を高めるとともに、生徒の進路希望に合わせて一人一人に個別最適化された学習活動を実施する。

例) 理 科：再生可能エネルギーの発電効率の研究

商業科：プログラミングを用いたマーケティング

地歴科：小・中学校と連携した防災に関する授業

- ・地域課題の発見や解決へのアプローチなどを通して、これまで以上に地域社会と深くつながり、生徒の資質・能力を高めることで「ブーメラン人材」を育成する。

※ブーメラン人材…再び地域に戻り、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を利用して、生業・事業・産業を創出する人材。求められる資質・能力としては、郷土愛、地域活性化への使命感、課題解決力、ネットワーク構築力、コーディネート力などが挙げられる。

#### ○地域社会とつながる授業

本校では、これまでも「総合的な探究の時間」や学校設定科目「未咲輝（みさき）学」で地域と連携して探究活動を行ってきたが、時間数が限られていた。今回、地域社会学科（仮）の設置に当たり、地域探究活動に関係する特色ある学校設定科目「地域文化と国語」（2単位）、「郷土芸能概論」（3単位）、「トライブラーニング」（4単位）、など地域資源を最大限に生かした、本校でしか学ぶことのできないオンリーワンの授業を展開していく予定である。

このことにより、地域社会とより深くつながる取組を実施できる。例えば、県外高校とのオンラインでの定期的な交流や中学校・企業などと連携した地域探究活動、地域の大人を巻き込んだキャリア教育などが挙げられる。また、昨年度は、コンソーシアムに専修大学が加わり、更に今年度は大正大学が加わることとなっており、研究室訪問等の県外フィールドワークや来県した大学生との交流など、地元地域だけでなく、全国ともつながる探究活動を実施していく。その際には、他県に先駆けて配備された一人1台端末を最大限活用し、ウェブ会議システムやチームコミュニケーションツールなどで、より充実した活動としたい。

また、本校独自に、地域人材や外部人材などをリストアップすることにより、「地域特別講師データベース」を作り、地域探究活動の内容にあった人材をすぐに検索し、よりスマートな活動にすることとしている。

以上のような取組を実施することで、郷土愛や地域活性化への使命感など、「ブーメラン人材」に求められる資質・能力の育成につなげるとともに、実社会や日常生活の課題を発見・解決し、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成につなげていきたい。

#### ○教科等横断型授業

これまでのカリキュラムでは、各教科、単元において、教科等横断型授業の計画を作成する際の日程調整が課題となっていた。しかし、各教科においてあらかじめ教科等横断型授業を組み込んだ年間指導計画を作成しておくことで、スケジュールの管理が容易になり、計画的かつ継続的な教科等横断型授業の実施が可能となる。また、現在行っている「未咲輝（みさき）学」で取り入れているデータサイエンスやプログラミング教育なども積極的に取り入れ、科学的な根拠に基づいた課題解決能力の育成にもつなげたい。

また、教科等横断型授業が、異なる教科の単なるコラボレーションになることがないよう、実社会や日常生活における課題を設定し、それを異なる教科の視点から解決していくことを通して、「多面的に学び、考える力」を身に付けさせたい。

以上のような取組を実施することで、新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」を身に付け、地域社会とつながることのできる人材の育成につなげていきたい。

## 2 事業の目的等

### (1) 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科を設置する必要

#### ○本校を取り巻く状況

西宇和郡伊方町唯一の高等学校である本校では、進学や就職を機に都市部へ転出する生徒が多く、地域活動の担い手不足が深刻化している。このような状況の中、本校では、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を地元に戻って活用し、生業・事業・産業を創出する「ブーメラン人材」の育成を目標として、地域との協働活動に積極的に取り組むことができるカリキュラム開発や、コンソーシアムの構築などに取り組んできた。このような取組を通して、町内における高等学校の立ち位置を、地域の若者を町外へ送り出す「出口」から、町内はもちろん、全国の若者を呼び込み地元への定着率を向上させるとともに、「ブーメラン人材」が他地域とのパイプ役となることで移住者を増加させ、持続可能な地域を創ることができる「入口」への変化を図ってきた。

#### ○「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」以前の取組（H27～H30）

主に地域住民や団体など地域側のニーズに応える形で多くの活動を実践し、地域全体を学びの場として捉え、地域課題の解決を目的とした探究活動を行うことで、調整力やコミュニケーション力などの生きる力を育ててきた。その中で、生徒の主体性を育む活動に重点を置き、愛媛県内・外の高校生や大学生を招聘し、各地の地域活性化活動事例を発表・共有し、より高度な活動に向けたネットワーク形成の場として、全国の高校生・大学生等と交流を持つ高校生シンポジウム「せんたんミーティング」を主催するなどの取組を行った。一方で、カリキュラムの編成上、体系立った効果に導きづらい側面も見られた。

#### ○「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」での取組（R元～R3）

それまでの課題を踏まえ、生徒の自主的な取組を活動の中心に据えながら、より高度な新カリキュラムの編成や組織編成に取り組み、「地域理解」「地域課題の発見・解決」「ブーメラン人材の育成」を3年間継続して行うことができる学校設定科目「未咲輝（みさき）学」の開設・運営を中心とした整備を行った。また、組織づくりとしては町役場や地元NPO団体といった、地域に深く根差した団体に加え、県内外の大学等の教育機関にも参加していただき、地域の実態に即したコンソーシアムを編成した。これらの取組により生徒たちの探究活動はこれまで以上に広がり、深みが増すことになった。年度当初と年度末に行っているルーブリックを用いた生徒の自己評価において、計画力、判断力、実践力、調整力、コミュニケーション力という全ての項目で、年を追うごとに成長が見られている。本校の探究活動は、外部人材と関わりながら生徒自身が企画・実践を進めていくという特徴があるため、特に、生徒の計画力、調整力、コミュニケーション力をしっかりと育むことができる。また、令和元年度から本格的に県外生徒募集を開始し、本校の教育活動に関心を持った県内外からの入学生が増加したことで、地域からも高く評価していただいております。新しい学校の在り方や教育活動について研究を重ねている。

#### ○必要性

以上のようなことを踏まえ、「学校」ではなく「地域」という枠組において、生徒一人一人に個別最適化された学びをこれまで以上に提供していく必要があると考えている。そのためには、学校内外の多様な人たちと関わり、対話しながら、生徒を「社会に生きる一人の人間」としてたくましく育てていくことができる学校づくりを推進していくことが必要不可欠である。「社会とつながり、たくましく生き抜くことができる生徒の育成」を目標とし、外部人材との連携に加え、各教科・科目における単元の縦断化や教科等横断型授業などを柱としたカリキュラムの再編を高いレベルで行っていくためにも、本校が地域社会学科を設置する必要性がある。

(2) 学際領域学科又は地域社会学科における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

○目的

・「社会に生きる一人の人間」として、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成

・新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」を身に付けることで、地域住民の視点に立った課題やニーズを発見・解決することができる、地域社会とつながる人材の育成

○目標

・「ブーメラン人材」を育成することによる、地元への人材の定着率の向上。

・自らが「ブーメラン人材」として、他地域とのパイプ役となり移住者を増加させることによる、持続可能な地域を作ることができる地域人材の育成。

・地域課題の発見・解決に取り組む探究活動が、生徒自身の進路実現と結び付く仕組の構築。

○背景

本校の位置する伊方町は、日本一細長い佐田岬半島の先端に位置し、主な産業は農業や漁業という町である。本校は伊方町の最西端である三崎地区にあり、隣町までは車で40分程度を要する。伊方町は高齢化率が47%を超えており、愛媛県内で2番目に高い自治体である。少子高齢化の急速な進展による年少人口の減少に加え、高校卒業後、進学や就職を機に都市部へ転出する若者が多いことなどが現在の状況を招いている。

○教育を通じて育成を目指す資質・能力

・本校は地元をはじめ、県内各地や全国各地から多くの生徒が入学しており、全校生徒の半数以上が寮生活を送っている。このような状況において「地元」や「地域」という言葉の指し示す範囲を再定義するとともに、将来的に日本中に本校及び伊方町の関係人口を増やすことができる好機と捉え、バックキャスト的に、現在必要とされる教育活動を行っていく必要がある。

・地域社会学科を設置することで達成すべき資質・能力として、「社会に生きる一人の人間」としてたくましく生き抜く力が挙げられる。この力は、少子高齢化や産業の衰退という社会課題最先端地域である伊方町全体を学びの場として、地域人材を外部専門家として定義し、地域と関わり地域の中での探究を推進することで、生活に根差した形から育成される。

・学校を含んだ伊方町全体を大きな学びのフィールドとした3年間の継続した活動を通して、伊方町への愛着を深め、生涯にわたり本校及び伊方町と関わっていく姿勢も育む。これにより、伊方町の関係人口を増やすことに加え、地域特別講師データベースを継続させ、地域の活性化につながるることができる。

・生徒は、自分たちのアイデアが、地域にとって有用か、実現可能か、持続して取り組むことができるかなど、検討・実践・改善を繰り返す中で、課題を発見・解決するための方法や手段を体系化し、汎用性のあるデザイン思考として身に付けていくこととなる。地域探究活動では、地域住民と対話してニーズを聞き取る共感力や対話力、協働的な解決方法のアイデアを生み出す力を育成し、現状をより良い状況へ改善することを目的に、自らの行動指針を決定できる資質・能力を育成する。

・自己理解なくしては、地域を理解し適切に関わることや探究活動における適切なゴールの設定は困難である。また、探究活動を通して正しく社会と関わっていくためには、その基礎となる教科の力が必要である。しかし、生徒は探究活動に必要な力と教科において育成する力とを分けて考えてしまう傾向にある。そこで、自らの探究活動の計画やゴールを設定する際に、その達成のために必要な力を各教科においてどのように育成していくのかを生徒自身に考えさせ、成果の検証において振り返らせることで、探究活動を核としたより深い教科等横断的な学習を実現するとともに、教科等で身に付けた力を実社会で生かす力として活用できる力を育成する。



### 3 実施体制

#### (1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

##### ○実施体制

##### (1) 管理機関の役割

三崎高校が地域社会学科の設置に向けた検討をする中で、教育課程の編成や新しい学校設定科目の設置に関する指導を行い、新学科のカリキュラムが充実したものになるよう支援することとしている。また、運営指導委員会を設置し、県内外の有識者から指導・助言、成果に関する評価をいただき、本事業の運営に生かしていく予定である。

教職員体制に関する支援もすでに行っており、小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員、三崎高校出身の優秀な教員及び同校勤務年数が長いベテラン教員を配置している。また、同校におけるICT活用に関する教員・生徒への支援のため、ICT教育支援員を県の一般財源で配置することとしている。

##### (2) コンソーシアムの構成及び役割

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で構築された三崎高校のコンソーシアムは、多面的な立場から多くの助言をいただくことによって、教育活動の充実に結び付いている。同事業終了後も、コンソーシアムは継続し、今年度は、大正大学、株式会社 Prima Pinguino、伊予銀行が新たに加わることになっている。

コンソーシアムは立案された計画や、実施状況に基づく助言等を踏まえて、プロジェクト全体に対する提案・支援等を行う。実際の活動において求められる支援としては、事業実施中のプロジェクトに対する新たな視点からの提言や、その実現を可能にする外部人材の紹介・調整等が挙げられる。また、コンソーシアム関係者にも各教科の授業や課題研究活動の講師として招くことで、生きた組織として活動していくとともに、三崎高校の教育目標を共有した上で、豊かな学びの土壌を醸成することができるコンソーシアムの編成を目指す。

##### (3) コーディネーターの配置（委託費）

構想調書提出時に想定したコーディネーターの方が、仕事の都合上、任用が難しくなった。現在、三崎高校と連携し、適切な人材を探しているところである。コーディネーターについては、高校と地域社会の協働体制づくり、地域社会に開かれたカリキュラムづくり、新たな人の流れと多様性ある教育環境づくりなどができる、コーディネーターとしてスムーズかつ、的確に三崎高校と関係機関をつなぐ人材を想定している。

##### ○事業の管理方法

管理機関である愛媛県教育委員会においては、これまで「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」（本県事業）、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」など、地域協働に関する様々な事業の管理・運営に関わってきた。また、本県高校等がSGHの指定を受けた経験や、現在SSHの指定を受けている学校もあるため、これまでに蓄積してきた事業成果やネットワーク等を生かし、三崎高校に助言を行うとともに、本事業において他団体や外部人材を積極的に活用することとしている。

三崎高校では、各年度を3期に分けてスケジュールを立てており、カリキュラム再編の検討のための校内会議を各学期2回の年間6回計画し、長期休業中には校内研修や先進校との情報交換等も計画している。これらのスケジュールを管理し、適切に事業が行われるよう指導するとともに、会議の内容について報告を受け、助言等を行う。

また、運営指導委員会として、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で運営指導委員を委任した方々に加え、大正大学地域創生学部教授である浦崎太郎氏、株式会社 Prima Pinguino の代表取締役である藤岡慎二氏への委任も予定している。浦崎氏及び藤岡氏からは、地域社会学科の設置に向けて、高校と地域との協働の視点から、専門的なアドバイスをいただくこととしている。このように、研究者や地域教育の中核となる人材に、指導・助言していただくことで、三崎高校の事業が同校の生徒、教職員だけではなく本県全体の財産となるよう管理・運営する。

※運営指導委員会、コンソーシアムともに年2回以上の活動を予定している。

## (2) 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

### ○事業全体の成果検証について

本事業の成果検証については、以下のことを通して、管理機関が責任を持って行い、三崎高校にフィードバックすることとする。

- ・運営指導委員会及びコンソーシアム代表者会議における、進捗状況の確認及び改善点等の協議。
- ・三崎高校が校内成果発表会や各種発表会へ参加し、幅広く情報を発信。
- ・愛媛県教育委員会が主催し、県内高校等が、指定を受けた各種事業の取組や、独自の研究実践について発表し、その成果を広く高校生・中学生にまで普及する「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム」で、同校が発表することによる成果の普及。
- ・学校評価やアンケートを、学校及びコンソーシアム等で実施。
- ・卒業生の追跡調査を行い、特に県外進学者・就職者の動向を調査。
- ・ループブックを用いて、生徒個人の振り返りを実施。 など

### ○評価のための体制・考え方

評価については、三崎高校が本事業において目指している「社会とつながり、たくましく生き抜くことができる生徒の育成」が達成されているかに注目し行うこととする。

「地域との協働による高等学校教育改革推進（地域魅力化型）」で構築した校内や運営指導委員会等からの評価体制に加え、地域の人や卒業生、現在交流のある県外の高等学校などにもアンケート等を実施し、より多くの人から客観的な評価をいただき、事業の運営に生かすこととした。そのためにも、コンテストや発表会への応募、ホームページやSNS、フリーペーパーなどでの情報発信などを行いたい。

また、具体的な成果目標については、目標設定シートにある以下の観点に基づいて行っていくこととする。

- ・生徒による3年間の地域探究活動を通して、地域を担う人材としての資質・能力の向上度
- ・大学等進学者数のうち、将来出身地での就職を考えている生徒数及び地域創生関係の大学・学部等への進学者数
- ・高等学校卒業後及び大学等卒業後の出身地への就職者数の割合

年度末に、成果検証とともにこれらの評価を行い、実施内容やカリキュラムなどを修正していく、学校はもちろん、地域や県外の方からも評価していただける学科を設置したいと考えている。

※「3-(1)管理機関における実施体制」の補足

本県では、今年度から、「えひめ版STEAM教育研究開発事業」を実施することとしており、三崎高校とも連携し、研究開発を進めていきたい。

### (3) 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校における事業の管理方法

#### ○事業の管理方法

平成 27 年度からこれまでの 7 年間の地域探究活動において、本校が築き上げてきた実施体制において、本事業の管理を行う。本校では、校務分掌として 4 年前に地域協働課を立ち上げ、地域探究活動の窓口として活動に取り組んできた。本事業においても、地域協働課を中心とした校内運営組織を作り、事業を推進していく。

#### ○具体的な方策

##### (1) 地域社会とつながる授業

「総合的な探究の時間」や学校設定科目「未咲輝（みさき）学」において研究テーマごとに生徒を縦割りにしたグループ（以下、「研究グループ」という。）に、複数の担当教員を配置し、全教職員が探究活動に関わることとし、研究グループごとに毎時間生徒が活動記録を記入し、担当教員が確認することで毎時間の活動の記録及び管理を行う。本事業においては、これまで行ってきた地域探究活動の実施体制を基にしながら多様な資質・能力、興味・関心を持つ生徒一人一人が、より主体的に活動することができるよう、個人探究活動の集合としてのグループ探究活動の在り方や、探究サイクルを分割することによる探究活動の高密度化などの新たな実施体制づくりに取り組む。

##### (2) 教科等横断型授業

単元縦断及び教科等横断的な取組を推進していくために、定期考査終了後など、新単元に入るタイミングにおいて、校内カリキュラム検討委員による検討会を開くこととする。また、毎年校内で実施している研究授業において、教科等横断的な内容による研究授業を、年に複数回実施することで、教職員の研修の機会を確保することとしたい。

##### (3) 地域協働課員の役割

地域協働課員は、必要な外部人材の紹介、調整を行ったり、研究グループごとの連携を図ったりするなど、担当教員のサポートを行う。また、研究グループの担当教員や代表生徒が定期的に進捗状況等を話し合う場を設定することで、各研究グループがスムーズな情報交換を行い、それぞれ連携したり、サポートし合ったりしやすい環境を作っていく。さらに、本事業において設置されるコーディネーターと連携を取ることで、これまで以上に校内外の人材の交流を促進していきたい。生徒を活動の中心に置き、複数の担当教員がサポートを行い、その外側で地域協働課がサポートを行いながら、研究活動全体をマネジメントしていく。また、各研究グループでの代表生徒が、学校の代表として地域おこし活動を行う「せんたん部」を運営し、月に一回程度情報交換会を行う。

##### (4) コーディネーターの役割

地域社会学科設置に向け、外部とのハブになり、地域における探究活動のスムーズな実施のための素地を作る。さらに、開かれた学校としてコンソーシアムをはじめとした地域や関係者の方々に本事業を含めた、学校活動全体のサポートをしていただく。

月に 2 回程度、授業担当教職員とコーディネーターが、「総合的な探究の時間」及び「未咲輝（みさき）学」等における探究学習の進捗状況の報告及び今後の活動方針を練るための会議を実施する。また、コーディネーターは職員室に常駐し、日頃から密に情報交換を行い、効果的な教育を推進する。

(4) 管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

○「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」以前の実績（H27～H30）

- ・地域の和菓子店との協働で新たな特産品となる地元佐田岬産の温州みかんを用いた「みっちゃん大福」を研究開発（H27）。のちに、「こんなのあるんだ！大賞 2019」大賞を受賞（R元）。
- ・漂着物であるブイ（魚等の養殖で使う直径 30 センチメートルほどのプラスチック製の浮き）を中心とした漂着物を再利用し、地域の方と協働して制作したブイアート作品「登龍門」が「えひめ愛顔のこども芸術祭」でグランプリとなる県知事賞を受賞（H28）。  
※この取組は現在の生徒にも受け継がれ、アート作品の制作だけではなく、ブイを使ったスポーツイベント「ブイリンピック」を開発し、地域のイベントや地元中学校の運動会で実施されている。昨年度、大分県で開催された楽しみながら環境について考えるイベント「おおいとうつくし感謝祭」においてブース出展を行うなど、現在も活動の幅を広げている。
- ・高校生シンポジウム「せんたんミーティング」を立ち上げ、高知県立須崎高等学校、香川県観音寺市の高校生まちづくりグループ、愛媛県立野村高等学校、愛媛大学、名城大学、尾道市立大学等の、高校生・大学生を招聘し活性化事例を共有するシンポジウムを行い、生徒自らが、準備（手配・広報・会場設営等）から当日運営（司会・受付・機器類オペレーション・まちあるき実施）などを実施（H29～）。
- ・生徒自らが地域住民へのインタビュー、調整をはじめとした制作業務を担うとともに、上映会の実施運営も行った地域PRのための短編映画「せんたんビギンズ」の撮影及び上映（H30）。

○「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の実績（R元～R3）

- ・町内の一つの集落全体を舞台と見立てて各研究班がそれぞれの研究成果を発表する「せんたん劇場」の開催（R元）。
- ・廃校となった地域の中学校を舞台に 15 以上の外部団体と二つの高校に参加してもらった「みさこうマルシェ（廃校活用イベント）」の開催（R元）。
- ・地元の海水から自分たちで精製した塩を使って開発したオリジナルスイーツを提供する「みさこう café」のオープン（R2）。
- ・「えひめ地域づくりアワード・ユース 2020」最優秀賞（R2）
- ・「第3回ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会」金賞並びにベストカテゴリー賞・銅賞（R3）
- ・「EGF キャンパスアワード」優秀賞（R2・3年度）・三浦工業賞（R3年度）
- ・「第8回ディスカバー農村漁村の宝」特別賞【先端発信賞】（R3）
- ・「第12回地域再生大賞」優秀賞（R3）

※本校の取組は高い評価を得ており、本校での探究活動に魅力を感じた志願者が全国から入学しており、生徒数の増加にもつながっている。



(5) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
大正大学地域創生学部教授	浦崎 太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議 座長
株式会社 Prima Pinguino 代表取締役	藤岡 慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
愛媛大学社会連携推進機構	秋丸 國廣	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」運営指導委員
文部科学省総合教育政策局 CSマイスター	西村 久二夫	
いよぎん地域経済研究センター	森 洋一	
伊方町立三崎小学校	野井 純	
伊方町立三崎中学校	野村 雅英	
伊方町役場総合政策課	菊池 嘉起	
伊方町教育委員会事務局	阿部 茂之	
町見郷土館	高嶋 賢二	

(6) 運営指導委員会が取り組む内容

- 運営指導委員会は、年に2回以上開催し、事業の運営や実施状況等につき専門的見地からの指導・助言、成果に関する評価をいただく。生徒一人一人の能力・適正、興味・関心等に応じた学びを実現するためには、地域社会との協働活動は必要不可欠であり、その実現のための実施体制の構築支援等に特に注力していく。
- 大学研究者や地域教育の中核となる人材に参加してもらうことで、三崎高校の事業が普通科改革の実現及び高校魅力化の先進事例として、同校の生徒・教職員はもちろんのこと、愛媛県全体の財産となるよう管理・運営する。

#### 4 学際領域学科又は地域社会学科における取組

##### (1) 学際領域学科又は地域社会学科におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添1「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）

###### ○本事業における本校の目的

- ・「社会に生きる一人の人間」として、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成
- ・新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」を身に付けることで、地域社会とつながる人材の育成

これらを実現するために、各教科において「地域社会とつながる授業」と、地域探究活動を軸とした新たな「教科等横断型授業」の実施を大きな柱としている。これらの取組を進める中で、外部専門家や地域人材等との協働体制の構築に取り組みとともに、本校独自のSTEAM教育を実践し、生徒に幅広い視点を身に付けさせたい。

###### ○地域社会とつながる授業

- ・「総合的な探究の時間」の活用
  - 地域探究活動の深化
  - 地域を生かしたキャリア教育
  - 中学校と連携した地域探究活動
- ・学校設定科目「未咲輝（みさき）学」（総合）
  - 地域理解（地域の歴史や地元企業について学ぶ）
  - データサイエンスを学び、RESAS、e-Statなどのビッグデータの利活用
  - 地域探究活動や起業家育成プログラムなどを実施
    - ※データサイエンスを学び、ビッグデータを用いて、地域課題をエビデンスに基づいて分析することで、地域探究活動や起業に関する学びを深めることができる。
- ・県内外高校との連携（現在、石川県立能登高校や立命館宇治高校等と連携中）
- ・大学や企業との連携
- ・その他の特色ある学校設定科目
  - 「地域文化と国語」（国語科）：地域の伝承や文学者を教材とし、吟行や拓本などの体験活動を実施
  - 「郷土芸能概論」（芸術科）：地域の伝統芸能や地域行事に参加し、和楽器の演奏方法を学習
  - 「トライブラーニング」（総合）：ボランティア活動や他校との協働活動を実施

###### ○教科等横断型授業（社会をたくましく生き抜く人材の育成）

- ・年間指導計画に組み込み、計画的に実施
- ・実社会や日常生活の課題について、異なる教科からアプローチ
- ・「多面的に学び、考える力」を育成
- ・本校独自のSTEAM教育の実施
- ・教科等横断型授業の例
  - 「防災」→数学×保健体育×地理
  - 「販売促進」→商業×データサイエンス×公民 など

## (2) コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

- 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」において構築したコンソーシアムを基に、本事業でも関係機関との連携・協力体制を構築する。令和元年度に8団体でスタートした本校コンソーシアムは、令和3年度には12団体に増え、更に今年度には15団体となる予定であり、地域探究活動を通して多くの人々をつなぎ、協力体制を築くことができている。コンソーシアム関係者は、年に2回の会議だけではなく、オンラインを活用した遠隔授業、学校設定科目「未咲輝（みさき）学」での特別授業など積極的に教育活動に参画している。本事業においては、本校が特色としている地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、「総合的な探究の時間」や「未咲輝（みさき）学」以外の各教科の授業においても、コンソーシアム関係者に積極的に参加していただくことになっている。また、地域行事やインターンシップなど、学校外での地域活動における生徒の受け入れをコンソーシアム関係者に依頼する計画をしている。
- 今回配置するコーディネーターが、コンソーシアムなどの外部との連絡・調整等の業務を担うことで、担当者の負担軽減及び本事業のスムーズな運営が可能になる。関係機関との連携・協力体制の構築において重要な役割を果たすのが、コーディネーターであることから、業務内容や、地域人材の活用方法等の詳細については、他県の先進校や大学関係者から情報を収集し、より効果的な運用ができるよう準備を進めたい。

## (3) コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
大正大学	浦崎 太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議 座長
株式会社 Prima Pinguino	藤岡 慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
株式会社伊予銀行	松岡 建夫	金融教育講演会講師
愛媛大学	笠松 浩樹	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」コンソーシアム構成団体
専修大学	大崎 恒次	
一般社団法人佐田岬Sプロジェクト	宇都宮 圭	
NPO 法人さだみさき夢希会	田村 義孝	
NPO 法人二名津わが家亭	増田 克仁	
佐田岬みつけ隊	黒川 信義	
伊方町役場総合政策課	宮本 廉	
伊方町教育委員会委事務局	三好 要	
一般社団法人 E.C オーシャンズ	岩田 功次	
MIGACT	濱田 規史	
愛媛県教育委員会高校教育課	川本 昌宏	
公営塾未咲輝（みさき）塾	神宮 一樹	

#### (4) 配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名

#### 当該者の主な実績

構想調書提出時に検討していた、本校の公営塾講師（地域おこし協力隊）の方が仕事の都合上、コーディネーターを引き受けていただくことが困難となったため、現在新たな候補者を検討中である。

※事業申請時は候補者を検討中であったが、石本冨（いしもとさえ）氏に地域魅力化コーディネーターとして、令和4年8月1日から赴任していただいている。

#### コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

##### ○取り組む内容

- ・地域社会学科設置に向け、新しいカリキュラムの研究開発を行う。
- ・「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」の年間指導計画と実施内容の検討を行う。
- ・伊方町3地区に配置されている伊方町のコーディネーターと連携を図り、それぞれの地区の課題解決のための情報共有を行いながら、活動を行っていく。また、それぞれの地区に担当教員を配置し、地域、学校、コーディネーターの三者が常に連携をとることで、充実した地域と学校の連携・協働の推進に取り組んでいく。
- ・地域探究活動を行う際、コンソーシアムなどの外部機関との連絡・調整を行う。
- ・地域探究活動における教員・生徒のサポートを行う。
- ・「地域みらい留学」などにおいて、県外生徒募集活動のサポートを行う。
- ・本校独自の「地域特別講師データベース」を立ち上げ、その運用を行う。
- ・本校が新しく地域社会学科設置することや地域探究活動での取組などについて、ホームページやSNS、メディア等で情報発信を行う。 など

##### ○勤務形態

- ・勤務時間：1日7時間、週5日、35時間の勤務
- ・三崎高校の職員室に常駐し、校務分掌も地域協働課の一員として、地域探究活動の企画・準備・運営などに、教職員や地域住民とともに取り組んでいく。初年度においては、同校地域協働課員とグループを作り業務を行うことで、コーディネーターの支援を行う。また、コンソーシアム構成員と定期的な意見交換を行う場を設定し、円滑な業務の実施をサポートする。

(5) 学際領域学科又は地域社会学科の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実

地域社会学科設置に向け、生徒・保護者へは、本校で実施する「中学生1日体験入学」、各中学校での高校説明会、一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム主催「地域みらい留学」、本校HP・SNS (Instagram等) による説明、地域の方々へは、シンポジウム（運営指導委員やコンソーシアムの参加者の中から6名程度の方に依頼）や学校評議員会等での説明会を検討している。説明の中では次のような内容で、今後の三崎高校の方向性を明確に打ち出したい。また、対象は現中学2年生となるので、早急に準備を進め、新学科設置をアピールしていくこととしたい。

○新学科へ変更する目的

伊方町では、少子高齢化が急速に進み、人口減少、高齢化率の上昇は、大きな課題となっている。そこで、伊方町では平成28年度から、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、「伊方町・移住定住促進協議会」を発足させるなど、町ぐるみで人口流出対策に取り組んでいる。

本校も、伊方町唯一の高校として同協議会の構成メンバーに加わり、伊方町と連携し魅力化創出活動に取り組んできた。また、令和元年度から「地域との協働による高等学校改革推進事業（地域魅力化型）」による取組を行ってきたが、「総合的な探究の時間」と学校設定科目「未咲輝（みさき）学」の中での学習が中心であった。

今回、地域社会学科の設置に当たり、特色ある学校設定科目を新たに設置し、探究的な学習や体験活動等を通じ地域社会と協働しながら、地域課題の発見、解決に必要な資質・能力を育成する地域探究活動を充実させることとしている。

このような地域探究活動を通じて、生徒は、社会をたくましく生き抜く力や「デザイン思考」を身に付け、地域社会とつながる人材に成長すると考えている。

○特色ある新学科と教育課程及び進路指導

現在、就職・専門学校進学希望者、文系大学等への進学希望者、理系大学等への進学希望者に対応した3コースに分かれて教育課程を編成している。

今回、地域社会学科の設置に当たり、現在の3コースに1コースを加え、I型（就職・専門学校希望者）、II型（大学の社会共創系学部等進学希望者）、III型（文系大学等への進学希望者）、IV型（理系大学等への進学希望者）の4コースで、多様な生徒のニーズに応えていくこととしている。特に、I型とII型については、「総合的な探究の時間」と学校設定科目「未咲輝（みさき）学」と各教科、各科目とを連動させ、地域と連携した体験学習を深化させたい。また、三崎高校地域社会学科が特に力を入れている「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」により、課題解決力や論理的思考力等を身に付けることができるとともに、学びの強い動機付けとなり、学習意欲がアップし、進路実現の一助となる。また、地域探究活動を通して向上が期待できる、論文を作成する力やプレゼンテーション力などは、各種推薦入試等で重要な要素となる。

## 5 実施計画

### (1) 3ヶ年の実施計画の概要

#### ○令和4年度（1年目）

- ・コーディネーターを配置し、すでに伊方町3地区に配置されているコーディネーターや本校教員と連携させることで、高校をハブとした連携組織を作成する。
- ・コーディネーターと地域協働課の教員を中心に、地域人材をリストアップした本校独自の「地域特別講師データベース」を作り、講師を登録し、授業や地域探究活動などへ派遣するためのスケジュール調整等を行う。また、作成したデータベースを活用して、地域と連携した学習活動を各科目で年間一回以上行う。
- ・年間指導計画を見直し、「教科等横断型授業」を組み込むことで、現在の教育課程の中において、「総合的な探究の時間」及び「未咲輝（みさき）学」と各教科の連携授業などを実施する。
- ・地域社会学科令和6年度入学生の教育課程の研究及び編成を行う。校内のカリキュラム編成委員会で、大学関係者など外部の専門家の助言を受けることで、生徒にとって最適な教育課程を編成する。
- ・令和6年度入学生には、地域社会学科の学科名やカリキュラムなどの構想が固まった時点で、中学校の説明会やホームページ、SNSなどで、特に中学2年生とその保護者に、強くアピールしていく。地域に対しても、伊方町役場等も協力を得ながら、広報活動をしていく。

#### ○令和5年度（2年目）

- ・本格的に、新学科の詳細及び特色を中学3年生とその保護者に向けて、アピールする。現在行っている本校の中学生一日体験入学や各中学校の説明会での情報発信に加え、本校独自の説明会を行うなどして、積極的に新学科設置の趣旨とその魅力の普及に努める。
- ・新学科の教育課程を完成させ、愛媛県教育委員会に申請する。
- ・「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」について、前年度の改善点などを抽出し、校内のカリキュラム検討委員会等で協議する。

#### ○令和6年度（3年目）

- ・「地域社会学科」を設置。
- ・新しい教育課程での授業実践や、地域探究活動などの教育活動を行いながら、その効果や改善点などの確認を行っていく。
- ・1年間を通しての長期の検証に加え、各学期で中期的なPDCAサイクルを構築することで柔軟に修正を加えながら、生徒や学校、地域の実態に合った地域社会学科へとブラッシュアップしていく。
- ・コーディネーターの役割や業務内容、地元のコーディネーターとの連携についても、実態に即した運用ができるように関係者で定期的に協議する。
- ・「地域特別講師データベース」についても、事業全体の必要性を図りながら積極的に新しい人材の開拓を行う。



(2) 令和4年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生「えひめ未来創造人材育成事業」の実施</li> <li>・「エネルギー対策ディベート」の実施(1年生)</li> <li>・せんたんプロジェクト各6班中間報告会(2・3年生)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三崎保育所、社会福祉法人伊方社会福祉協会(つわぶき荘)との連携協力</li> <li>・四国電力、愛媛大学と協働</li> <li>・各地域メンターと連携協働</li> </ul>
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・未咲輝(みさき)学I「ブイアート」実施(1年生)</li> <li>・未咲輝(みさき)学I「地域理解」ポスターセッション開催(1年生)</li> <li>・みさこうフェスティバル開催(全学年)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPO法人さだみさき夢希会と連携</li> <li>・佐田岬みつけ隊黒川氏を講師として招致</li> <li>・三崎保育所、三崎小学校、三崎中学校、瀬戸中学校、伊方中学校と協働</li> </ul>
8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オープンハイスクール開催(1年生)</li> <li>・高校生SRサミット「FOCUS」参加(1・2年生希望者)</li> <li>・県外視察研修の実施@宮崎県立飯野高校(希望者)</li> <li>・「みさこうマルシェ」開催(せんたん部、希望者)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立命館宇治高校と連携協働</li> <li>・宮崎県立飯野高校と連携協働</li> <li>・NPO法人二名津わが家亭他、民間団体と連携協働</li> </ul>
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「第4回せんたんミーティング」開催(せんたん部、希望者)</li> <li>・愛媛県主催「EGFキャンパスアワード2022-2023」ビジネスプラン提出(3年生、希望者)</li> <li>・未咲輝(みさき)学I「インターンシップ」実施(1年生)</li> <li>・未咲輝(みさき)学II「RESAS」中間報告会(2年生)</li> <li>・みさこう郷土芸能部活動スタート(希望者)</li> <li>・「八幡浜ソーシャルビジネスチャレンジコンペ」ビジネスプラン提出(1・2年生希望者)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・愛媛大学、北九州市立大学他、民間団体及び県内外の高校と協働</li> <li>・伊方町内を中心とした企業</li> <li>・佐田岬みつけ隊黒川氏、町見郷土館高嶋氏を講師として招致</li> <li>・三崎地区青年団をはじめとする地域の方々と協働</li> <li>・佐田岬みつけ隊、MIGACTと連携協働</li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふるさとCM大賞」作品提出(希望者)</li> <li>・未咲輝(みさき)学II「地方創生☆政策アイデアコンテスト2022」プラン提出(2年生)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伊方町役場と協働</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みさこう郷土芸能部発表(希望者)</li> <li>・未咲輝(みさき)学IIポスター掲示</li> <li>・未咲輝(みさき)学IIIファイナルプレゼンテーション開催(3年生)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三崎地区青年団をはじめとする地域の方々と協働</li> <li>・MIGACT 濱田氏、SPC 代表横山氏を講師として招致</li> </ul>

<b>1 2 月</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2022 模擬国連 MUN 参加（2年生希望者）</li> <li>・ 県外視察研修の実施@島根県立隠岐島前高校（希望者）</li> <li>・ 保小中高合同アートイベント「MAP」開催（希望者）</li> <li>・ 愛媛県主催「EGF キャンパスアワード 2022-2023」発表（3年生、希望者）</li> <li>・ 進路相談会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 立命館宇治高校、福岡雙葉高校と連携協働</li> <li>・ 島根県立隠岐島前高校と連携協働</li> <li>・ 三崎保育所、三崎小学校、三崎中学校と協働</li> <li>・ 南予地方局及び地域の企業と連携</li> </ul>
<b>1 月</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Global Youth Fair～SURVIVE!～参加（1・2年生希望者）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 立命館宇治高校と連携協働</li> </ul>
<b>2 月</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「未咲輝（みさき）-SENTAN-発表会」開催（全学年）</li> <li>・ グローカルリーダーズ summit 参加</li> <li>・ フィリピンオンラインスタディツアー参加（1年生）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各連携団体と連携協働</li> <li>・ 宮崎県立飯野高校と連携協働</li> <li>・ 民間 NPO 法人アクセスと協働</li> </ul>
<b>3 月</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「せんたん新聞」発行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 伊方町役場と連携協働</li> </ul>



(3) 事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添2「目標設定シート」に記載。）

○教育活動全般について

- ・ 学校長のリーダーシップの下、全教職員で共通認識を図りながら学校で丸となって、本事業をスムーズに運営できるよう努める。
- ・ 各学期末には、職員会議等で進捗状況の確認や実施事業の振り返りを行う機会を設ける。
- ・ Teams などのチームコミュニケーションツールを用いることで、気付いたことや提案等をいつでも気軽に共有できる校内の仕組み作りを行う。
- ・ 本事業の進捗状況や打合せの内容、生徒及び教職員からの提案、授業研修会で出た意見などは運営指導委員会・コンソーシアムで共有し、多くの人から評価及び助言をもらうことで、事業の進捗状況の確認及び改善を図る機会とする。

○授業について

- ・ 校内の2クラスを指定した一般公開の「焦点授業」を実施し、地元中学校の教職員にも参観してもらい、その後、授業研修会を実施する。
- ・ 「焦点授業」のうち、1クラスは「地域社会とつながる授業」を実施し、授業改善や教員、生徒の意識改革につなげる。  
※令和2年度には、「国語総合」の授業において、『奥の細道』を学習後、愛媛県南予地域を代表する俳人である、芝不器男についての学習を行うとともに、実際に俳句を作り鑑賞するという授業を行った。作成した俳句は実際に「第67回不器男忌俳句大会」に投句した。その結果、最優秀賞として1名、入選として6名の生徒が表彰された。
- ・ 「焦点授業」のうち、もう1クラスは「教科等横断型授業」を行い、実社会や日常生活の課題をテーマに、異なる教科の複数の教員で横断的な授業を行う。
- ・ 「焦点授業」の様子等は本校ホームページやFacebookを活用して、随時情報発信していく。
- ・ 生徒を対象としたアンケートを年2回実施して、授業の評価を行い、その結果を基に改善を行う。

○「総合的な探究の時間」及び学校設定科目「未咲輝（みさき）学」について

- ・ 月初めと月末に授業担当教職員及びコーディネーターによる打ち合わせを実施する。
- ・ 月初めの会では、1か月の活動スケジュールを確認し、月末の会で進捗状況及び今後の活動方針の報告を行い、情報共有することで年間スケジュールにおける進捗状況等を確認する。
- ・ 必要に応じて、学校を代表して活動する「せんたん部」の生徒も交えた打ち合わせを行う。その際、「せんたん部」の生徒が各研究グループの進捗状況や要望事項等を報告することで、探究活動を「自分ごと」として捉え、自走性を高めることができる機会とする。
- ・ 生徒が記入するチャレンジシート（探究活動で自らが必要な力を各教科でどのように身に付けるかを記入するシート）による振り返りを基に評価及び改善を図る。

## 6 成果の普及のための仕組み

- 本校では、「総合的な探究の時間」の研究発表会を年に2回（中間発表会、成果発表会）実施している。中間発表会は、本校文化祭に合わせた研究成果ポスターの作成及び掲示、成果発表会はオンライン配信を含めた対面での発表である。また、公共施設を使用しての出前発表会やオンライン発表会の強化などを行い、より多くの人に成果を普及できる発表会の在り方を研究していく。また、例年、生徒は各種シンポジウムやプレゼン発表会に参加させてもらい、本校の取組を発表する機会を得ている。今後も、それらの発表会等に積極的に参加するとともに、できるだけ多くの生徒が成果発表を行うことができる機会を作っていきたい。
- 地域探究活動の研究成果を普及するための工夫として、平成29年度から開催している高校生シンポジウム「せんたんミーティング」の実施によるイベント形式の情報発信や、令和元年度から作成しているフリーペーパー「せんたん新聞」による刊行物としての情報発信、本校ホームページやFacebook ページによる即時性の高い画像・動画による情報発信などが挙げられる。これまでに本校が行ってきた様々な情報発信の更に効果的な活用法などを研究していきたい。地元地域への情報発信は対面による方法を、他地域への情報発信はオンラインによる方法を中心に研究を進める。
- 地域の子どもたちは地域で育てるという共通認識の下、近隣の高等学校と高校生コンソーシアムを構築し、その成果を発表し合うなど地域内での横の連携の強化を図ることで、成果の普及に努めていきたい。

## 7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

- 持続的な取組について
  - ・これまでの7年間の地域探究活動において本校が培ってきたノウハウや、これまでに築いてきた外部人材とのつながりを基盤にしながら、本事業で新たに構築される支援体制を維持するために、校内研修を行うことで、持続可能な組織づくりを行う。
  - ・本校地域協働課員やコンソーシアム構成員等が中心となり、ノウハウや校内研修の内容、研修方法などを整理していく。外部人材とのつながりについては、今回、立ち上げる「地域特別講師データベース」の継続的な運用により、引き継いでいくこととする。
  - ・全教職員が関わる中で研修を積み、全教職員が「自分ごと」として捉えることができるよう、意識改革を行う。
  - ・指定終了後のコーディネーターの配置について、県や伊方町と協議しておく。
- 資金面について
  - ・同窓会と連携して、「みさこう基金（仮称）」を設立し、同窓生を中心に広く呼びかけ、地域探究活動の資金源としたい。
  - ・話題性がある題材や規模が大きな活動については、クラウドファンディングなどを活用し、資金調達と情報発信を同時に行う。
  - ・財団の助成事業などに応募し、支援を得る。 など

管理機関名：愛媛県教育委員会

令和4年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

【愛媛県立三崎高等学校】地域社会学科（令和6年度設置予定）

地域社会学科

● 変化の激しい社会を生き抜くことができる人材の育成

- > 地域探究活動を通じた「生きる力」の育成
- > 教科横断的な学びによる「多面的に学び、考える力」の修得

● 地域社会とつながる人材の育成

- > 他者と協働し、自走するブーマラン人材
- > 新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」の醸成

● 地域社会を教育課程に位置付けたSTEAM教育・キャリア教育の推進

- > データサイエンスやプログラミング教育を学び、RESASなどのビッグデータを活用
- > 地元企業・自治体と連携したインターンシップや進路相談会などの実施
- > 地域活性化につながる起業家育成プログラムの実施

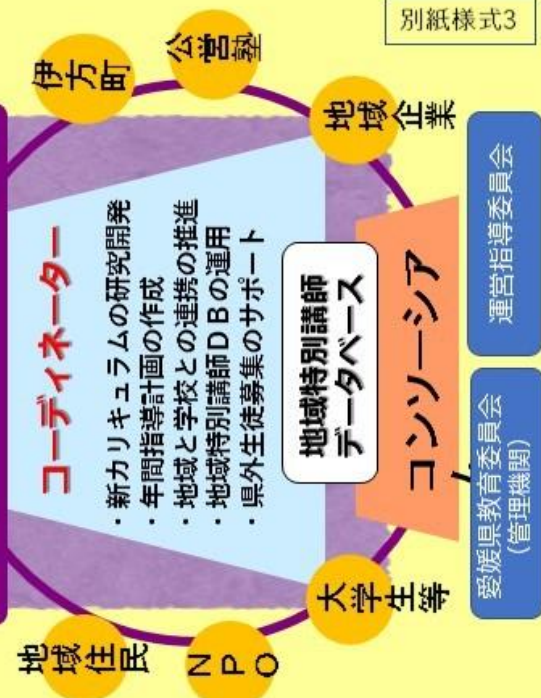


これまでの7年間の地域探究活動の取組を基盤とした、先進的な「地域社会学科」を設置

オンリーワンのカリキュラムを開発 ● 地域との連携をさらに強化

地域社会に開かれた教育課程	教科横断的授業
3年次「起業家育成」 ◆ 起業プランの作成 ◆ 研究成果発表会 ◆ 他校との連携活動	充実した教科学習 (1~3年) 総合的な探究の時間 (1~3年)
2年次「地域課題の発見・解決」 ◆ 課題別研究 ◆ 県外視察研修 ◆ せんたんミーティング ◆ 個別探究活動	特色ある学校設定科目 地域文化と国語 (3年) トライブラーニング (2・3年) 郷土芸能概論 (1~3年) 未咲輝学 (1~3年)
1年次「地域理解」 ◆ 地域見学 ◆ 地域拠点での交流 ◆ 異年齢者交流 ◆ インターンシップ	

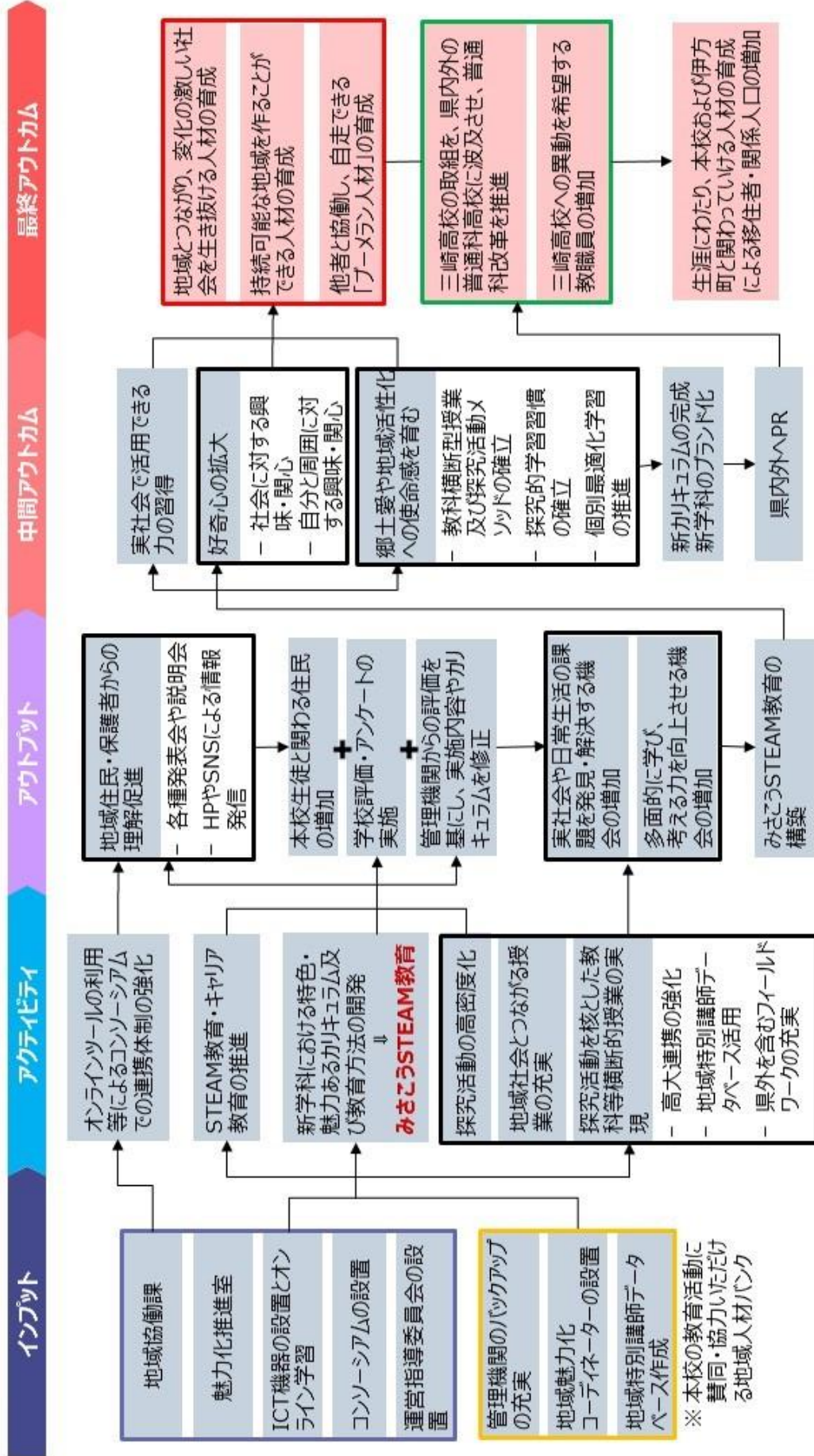
愛媛県立三崎高等学校



別紙様式3



# 愛媛県立三崎高等学校 普通科改革支援事業ロジックモデル Ver.2





## II 組織の取組

## 1 過年度の取組

本校では、平成 27 年度土曜授業推進事業の指定を受け、土曜日を年間 10 日開校日とし、教育活動を実施した。本校は伝統的に、体育祭や文化祭をはじめとした学校行事への地域住民の参加率が高く、地方祭等の地域諸行事においても、本校の生徒がその担い手として参加するなど、地域との関わりが非常に強い。そこで、その計画段階において、教科指導だけでなく、地域活動を取り入れることにした。それまで、本校においては担当課や部活動単位において、それぞれ地域活動に取り組んでおり、学校全体として取り組むような体系的なシステムが確立されていなかった。そのため、週に 1 時間の「総合的な学習の時間」に、学校全体として地域連携活動に取り組むよう、「総合的な学習の時間」に取り組む地域活性化事業を「三崎おこし」と名付け、カリキュラムの見直しを行った。1 年生「地域理解学習」、2 年生「地域活性化プランの作成」、3 年生「地域活性化プランの実践」とし、「総合的な学習の時間」に加え、開校土曜日の 2 時間を使って年次進行で三崎おこしに取り組むこととした。また、研究グループごとに教員を配置することで、生徒・教職員ともに「学校全体で地域協働活動に取り組む」という意識が醸成された。

平成 28 年度には「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」、平成 29 年度には「コミュニティスクール推進校」、平成 30 年度には「地域を担う心豊かな高校生育成事業地域活性化プロジェクト」の指定を愛媛県教育委員会より受け、地域探究活動の研究に取り組んできた。4 年間の取組を通して、本校卒業生や地域住民、各種団体と連携して活動する機会が増加し、多くの人に本校の取組を知ってもらうとともに、地域との協働による活動への協力体制を確立することができている。

さらに、平成 28 年度より本校は、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中核事業として設立された「伊方町移住・定住促進協議会」の構成メンバーとして連携活動を行っている。具体的には、同協議会の会議への参加に加え、同事業の「次世代人材育成事業」として外部講師を招き、学校という枠を越えた町全体でのシンポジウムを開催したり、東京で行われた「特産品フェア」に本校生が帯同し、町の PR を行ったりするなど、地域を担う学校として伊方町と連携して多くの活動に参加してきた。またその際には、「伊方町移住・定住促進協議会」に共催、伊方町、伊方町教育委員会に後援していただいた。

令和元年度から令和 3 年度においては、文部科学省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」指定を受け、これまで、それぞれの場面での地域探究活動で育まれた学校と地域の結び付きを軸に、より組織的、継続的な取組を行っていくための組織である「コンソーシアム」を構築することにした。コンソーシアムは地域の人を中心に組織し、様々な立場、視点からの指導・助言を行ってもらうことで、本事業の効果的な実施を行っていくとともに、コンソーシアムメンバー同士の連携を深めることも目的とした。初年度は、8 団体にコンソーシアムの参加してもらっていたが、令和 3 年度には 12 団体に参画していただいております。より多くの人に本校の活動に関わっていただくことができた。

上記のように、本校が本事業採択前より取り組んできた地域との協働活動において積み上げてきた経験や、そこから得られた学びは、生徒、教職員と校内全体のそれぞれの立場の間で共有されたと同時に、地域や外部人材との連携を生み出してきた。

## 2 コンソーシアム

### (1) 概要

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で構築された三崎高校のコンソーシアムは、多面的な立場から多くの助言をいただくことによって、教育活動の充実に結び付いている。同事業終了後も、コンソーシアムは継続し、今年度は、大正大学、株式会社 Prima Pinguino、伊予銀行の3団体に新たにコンソーシアムに加わっていただいた。

コンソーシアムは立案された計画や、実施状況に基づく助言等を踏まえて、本事業のプロジェクト全体に対する提案・支援等を行う。実際の活動において求められる支援としては、事業実施中のプロジェクトに対する新たな視点からの提言や、その実現を可能にする外部人材の紹介・調整等が挙げられる。また、コンソーシアム関係者にも各教科の授業や課題研究活動の講師として招くことで、生きた組織として活動していくとともに、三崎高校の教育目標を共有した上で、豊かな学びの土壌を醸成することができるコンソーシアムの構築を目指して活動した。

本年度は9月と2月の2回開催し、これまで築いてきた協力体制を再確認できた。また、本校の特色である地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、「総合的な探究の時間」や「未咲輝（みさき）学」を中心に学習活動にも積極的ににも参加してもらった。今年度からは年に2回の会合に加え、オンラインを利用して定期的な情報共有を図ることで、スムーズな連携を行うことができた。今後は、学校外での活動では、地域行事やインターシップなど、地域探究活動における生徒の受け入れをコンソーシアム関係者に依頼する計画をしている。



コンソーシアム参画団体一覧（順不同、敬称略）

所属	氏名	主な実績
大正大学	浦崎 太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議 座長
株式会社 Prima Pinguino	藤岡 慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
株式会社伊予銀行	松岡 建夫	金融教育講演会講師
愛媛大学	笠松 浩樹	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」コンソーシアム構成団体
専修大学	大崎 恒次	
一般社団法人佐田岬Sプロジェクト	宇都宮 圭	
NPO法人さだみさき夢希会	田村 義孝	
NPO法人二名津わが家亭	増田 克仁	
佐田岬みつけ隊	黒川 信義	
伊方町役場総合政策課	宮本 廉	
伊方町教育委員会委事務局	三好 要	
一般社団法人E.Cオーシャンズ	岩田 功次	
MIGACT	濱田 規史	
愛媛県教育委員会高校教育課	川本 昌宏	
公営塾未咲輝（みさき）塾	神宮 一樹	

(2) 第1回コンソーシアム代表者会議

ア 期日 令和4年9月20日（火）

イ 参加者

浦崎 太郎氏（大正大学）、笠松 浩樹氏（愛媛大学）

藤岡 慎二氏（Prima Pinguino）【オンライン】

岡田 妙氏（Prima Pinguino）

松岡 建夫氏（伊予銀行）、大崎 恒次氏（専修大学）【オンライン】

宇都宮 圭氏（佐田岬Sプロジェクト）、田村 義孝氏（さだみさき夢希会）

増田 克仁氏（二名津わが家亭）、黒川 信義氏（佐田岬みつけ隊）

宮本 廉氏（伊方町役場）、寺坂 哲郎氏（伊方町役場）

三好 要氏（伊方町役場）、岩田 功次氏（E.Cオーシャンズ）

濱田 規史氏（MIGACT）、川本 昌宏高校教育課長、近藤 啓司指導主事

神宮 一樹未咲輝塾塾長、和田 俊之校長、中西 薫教頭

二宮 忠事務長、津田 一幸地域協働課長、河野 雄太地域協働課員

日浅 理香地域協働課員、石本 冴コーディネーター

ウ 開会行事

（校長挨拶）

平成31年度より3年間、「地域と協働による高等学校教育改革推進事業」を行ってきた。また、今年度からは文部科学省より指定を受け、「新時代に対応した高等学校教育改革推進事業（普通科改革支援事業）」を3年間行うこととなっている。令和6年度より仮称ではあるが、地域社会学科を開設し、新

しい三崎高校を作っていく。また、3つの目標を掲げて取り組んでいく。今年度からは学校の教員だけではなく、地域魅力化コーディネーターを設置し、伊方町の活性化、三崎高校の魅力化を進めていく。多くの意見を取り入れ、より良いものとしていきたいと思っているので、御指導・御助言いただきたい。

## エ 本事業の概要説明と生徒活動報告

### 【概要説明】

(津田教諭)

三崎高校で地域との協働活動を始めて8年目。三崎高校せんたんプロジェクトという名前で取り組んでいる。地域との協働活動を始めたきっかけを説明する。三崎高校を卒業後、県外、町外に出ていく生徒が多くなっていた。それを解決するために、地域の魅力づくりと地域に戻ってきてもらえるような生徒育成をしていきたいと考えるようになった。

これまでの取組では、「総合的な探究の時間」において6つの班を編成し、研究を行っている。今年度は自分のプロジェクトを探究する「マイプロ班」を加えて取り組んでいる。また、6つの研究班のリーダーの集まりが「せんたん部」として活動し、横のつながりをもてるようにしている。机上に用意させていただいたマーマレードは本校の生徒が地元の企業2社と連携して、商品化したものである。販売方法は検討中である。裂織は専修大学の学生と協力してよりよいものになるように研究を行っている。このように地域の方やNPO団体の方との協働でさまざまな取組ができています。

これまでの成果と課題について、進学ではこれまでの活動に積極的に取り組んだ生徒が旧AO入試や推薦入試を活用して進路実現をしている。このような生徒から「伊方町に帰ってきたい」という声も聞いている。就職では、地域協働の取組が始まり、地元に戻って就職する割合が高まっており、地元を大切にしたいという思いをもった生徒を育てることができていると思う。課題として、大学卒業後の進路を共有できず、連絡が途絶えてしまうことが挙げられるので、何か御意見があれば伺いたい。新たな課題として、「活動が多岐にわたっており、専門性が高くなっているため、教員だけでは補えない」、「他校でも実現できやすい普遍性のある取組等、再現性を高める必要がある」、「特色ある学校との比較」が挙げられる。

新事業のポイントとして、みさこうSTEAM教育を進めていくために、世の中の複雑な事象をつないで学びを活性化させる新たな取組の方法について御意見をいただきたい。また、地域特別講師データベース作成について、教員の異動があったとしても新任の先生が地域の人材にお願いしやすいようにするためにはどうすればよいのか、方法等検討していただきたい。

地域探究活動については、教員がいないと成立しないことから、教員の負担が大きくなり多忙化につながっている。少しでも負担を軽減できるような仕組みづくりが必要。学校と地域のこれからの関係について、「学校が依頼をして受ける」、また、「学校に依頼がきて受ける」ではなく、互いに資源を持ち寄って一緒に企画や運営を行う、横のつながりを作っていくことが必要。

最後に、新事業では「学校を核とした地域づくり」をベースとして、「生徒が楽しい」、「輝ける」、「やりたいことをやれる」カリキュラムを編成

していきたい。新しい学校づくりに取り組み、他校の参考になるようにしていきたいので、さまざまな御意見をいただきたい。

オ 質疑応答

(田村氏)

コロナ禍によってオンラインがかなり進んでいるので、卒業した生徒の後追いのために、オンラインをもっと活用したらどうか。例えば、Slack というアプリケーションを使い、プロジェクトごとに議論をおこなったり、LINE のオープンチャットで情報共有をしたりするなど、みんなが集まりやすく議論しやすい環境を作る。また、卒業生の参加により、社会で学んだことを母校に還元できるような仕組みを整えられないか。

(濱田氏)

卒業後のつながりは大切である。そのために、地域のコミュニティをオンライン上に作るのはどうか。コロナ禍でより身近になってきた。愛媛県では、DX の推進が行われている。県庁ではエールラボ愛媛という地域のコミュニティづくりのサービスを行っているので、それを活用してはどうか。

(増田氏)

心同士のふれあいのために、高校生が地域の中にもっと踏み込んできてほしい。地域の方は高校の取組を知らないで、どのように関わったらよいかわからない人も多いと思う。三崎高校で行われているみさこうカフェを古民家で行ったが、普段閑散としている地域が一気に活性化し、とてもよかった。このような取組を他地域にも還元していくとよいのではないか。

(教頭)

コロナ禍でみさこうカフェができていないが、ぜひこれからも地域に出ていき、みさこうカフェを開き、地域と協力していきたい。

(黒川氏)

三崎高校は伊方町の高校であるので、旧伊方町や瀬戸町にも名を売るような取組をしていく必要があるのではないか。伊方町在住の方は高校生を見ても三崎高校の生徒ではなく、川之石高校の生徒かと思うことが多い。高校生を見て三崎高校の生徒だと思えるような何かがあればよいと思う。

新しい時代に対応した高等学校について、全員に対してか、ある特定のグループに対してなのか、対象がわからない。個人の能力を高めていくことをやっていけたらと思う。

学校を核とした地域づくりを目指すとはあるが、小中高で行う内容が一貫していない。同じことを繰り返すのは少し違う気がするので、その点を改善していただきたい。

地域資源の活用について、地域に他にないものとして、海に突き出した佐田岬半島、インフラ、動植物など、ジオパークの理念としてわかりやすい場である。学校の教科の中に取り入れられることがあればお願いしたい。

(教頭)

伊方町全てで協力してもらえるようにしていきたい。

(黒川氏)

やらなければならないことはわかっていると思うが、それを実現するために具体的にどのように展開してくのか、移動の足はどうするのかなど、地域の人と話し合っ具体的案を提案して欲しい。

(教頭)

学校の教職員で話し合っ、みつけたやり方を第2回のコンソーシアムの時に提案できるようにしたり、教えていただきたい。

学校を核とした地域づくりについて、高校と地域との協働を小中学校とも一緒に行っていくことで、地元の子どもたちも三崎高校にきてくれるのではないか。また、地域資源の活用については宇都宮さんの協力のもと「佐田岬プロジェクト」に関わっている。

(宇都宮氏)

佐田岬灯台を使った地域活性化を今年度から2年間行う。日本財団の協力のもと、「海と日本プロジェクト」に取り組んでいる。灯台のある町の地域活性化を調査研究し、来年度実施していく予定である。伊方町では、伊方町にある10の灯台をどうにかして生かせないかと考えている。その取組を三崎高校のカフェ班や釣り人に協力を仰いで、町を盛り上げていこうと予定している。

(教頭)

本校の生徒も協力をさせてもらって、地域の活性化に役立つような取組を行っていききたい。それが生徒の成長にもつながっていくと思う。

(藤岡氏)

やる視点とやめる視点をもち、取捨選択をしていくことが必要。そのために、自分たちの方向性や軸を決めていくことも重要である。

(教頭)

やれることとやめることを検討していきたい。皆さんからいただいた意見についても全てできるわけではないので、意見として取り入れて、取捨選択していきたい。

(岩田氏)

佐田岬らしいところである自然を取り入れてほしい。自然工学やアート、環境保全など。

小中高が地域活性化を行っていくなら、先生の教育をしてレベルアップしていくことが必要。自然を学べるような学科を作りたいと考えているので、小中高でも「自然がすき」と思えるようなことを学べる環境や自然を守りたいと思う子どもたちの育成をしていってほしい。

先生方を集めてレクチャーをして、先生方が学んだことを自分の言葉に置き換えて子どもたちに伝えるという仕組みができればよいと思う。

(教頭)

色々と御意見をいただきありがとうございました。第2回は2、3月に行う予定であるので、また御意見等があればよろしく申し上げます。

カ 閉会行事

(校長挨拶)

たくさんのお意見ありがとうございました。三崎高校が取り組んできた情報発信やイベント、特産品の開発、さまざまな活動を「総合的な探究の時間」と「未咲輝学」の週2時間で行ってきたが、全てをやりきることができなかった。新事業では授業の中に取り入れ、今までできなかったことや更なる研究ができるようにより多くの時間を使って進めていきたい。本日いただいた

意見を参考にして工夫をしていきたい。また、第2回の会議では、このような教育課程、カリキュラムでやっていくという案を出し、御意見をいただきたいと考えている。学校の中でも協力して進めていきたい。お時間をいただきありがとうございました。

(3) 第2回コンソーシアム代表者会議

ア 期日 令和5年2月15日(水)

イ 参加者

浦崎 太郎氏(大正大学)、大崎 恒次氏(専修大学)  
宇都宮 圭氏(佐田岬Sプロジェクト)、田村 義孝氏(さだみさき夢希会)  
増田 克仁氏(二名津わが家亭)、黒川 信義氏(佐田岬みつけ隊)  
菊池 嘉起氏(伊方町役場)、寺坂 哲郎氏(伊方町役場)  
宮本 廉氏(伊方町役場)、三好 要氏(伊方町役場)  
岩田 功次氏(E. Cオーシャンズ)、藤岡 慎二氏(Prima Pinguino)  
跡見 愛美氏(Prima Pinguino)、矢作 圭吾氏(Prima Pinguino)  
松岡 建夫氏(伊予銀行)、細川 昌弘主幹、近藤 啓司指導主事  
神宮 一樹未咲輝塾長、和田 俊之校長、中西 薫教頭  
二宮 忠事務長、津田 一幸地域協働課長、日浅 理香地域協働課員  
石本 冨コーディネーター

ウ 開会行事

(校長挨拶)

本日は御多用のところ、「令和4年度新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革事業)」第2回コンソーシアム代表者会議に参加していただき、ありがとうございます。

さて、令和6年度に向けて推進事業を進めてきた。変化の激しい社会に生き抜くための人材育成のために、新しい三崎高校の教育課程を各教科主任、各課の先生と相談してきた。

本校だけでは難しい部分は御指導をいただいたり、県のSTEAM教育実践校3校の参観をしたりするなどしてきた。本日はこれまでの成果を説明し、皆様の御助言をいただきたい。

エ .事業内容説明

(津田教諭)

これまで地域との連携からさまざまな活動を行ってきた。きっかけは伊方町の少子高齢化、三崎高校に入学生の低下等、地域の担い手不足である。これを機会に地域の課題を高校生の探究活動により、限界集落から持続可能な地域へというテーマのもと始まった。

今年で8年目であり、伊方町の人材を育てるだけでなく、県内外各地からの生徒もいるので新たな視点で取り組んでいる。

これまでの三崎高校のコースはⅠ型とⅡ型で、Ⅱ型は理系と文系に分かれていた。これからは仮称ではあるが「地域探究」、「人文探究」、「科学探究」のコース分けを考えている。今まではⅠ型が就職、Ⅱ型が進学という考え方を、どのコースでも就職、進学できるようにしている。Ⅰ型とⅡ型のラインが曖昧になってきている。その括りを取り除くという意味でも、探究活動を軸にしたコース分けにした。

「地域系」：より地域と密着した活動を行っていく。地元就職や地域系の大学進学。

「人文系」：地域探究活動を軸にしながら、人文系や社会学を学ぶ。

「科学系」：地域探究活動を軸にしながら、工学、科学を学ぶ。

※名称は全て仮称

この3コースからなる教育課程は、県教育委員会の方にチェックをしていただいて、令和6年度に向けて完成させていく。

もう一つの特徴は、週29単位（6時間授業の日を週4日、5時間授業の日を週1日）にし、放課後の時間を有効活用できるように設定したことである。これは、放課後に探究活動や生徒の個人探究、自分の時間等を設定できるようにするためである。学力面の心配をされる方がいる可能性があるが、本校の特徴である公営塾との連携を強化し、最低限の学力は授業で、公営塾で更なる学力向上をしていく。そして、スタディサプリというオンライン学習ツールの活用も行っていく。

現在の三崎高校の主な取組は、発表のとおり、6つの班で活動を行っている。ブイアート、インスタグラムへの投稿、みさこうカフェ、地域連携避難訓練、マーマレード販売、ツアープラン制作等に取り組んでいる。有志による取組も行っており、出身地関係なく、伊方町の伝統を受け継いでいる。

新たな取組計画としては、3つ考えている。一つ目は、「みさこうゼミ」である。放課後の時間に希望者を対象に大学のゼミのような機会を設けることである。教員がするのではなく、地域人材やオンラインによる外部人材に講師を依頼する。昨年度から佐田岬みつけ隊の地域団体に高校生を加入させてもらっており、学校が関与していない形でフィールドワークを行っている。それをモデルケースに地域の方や大学生等と連携をして行っていきたいと考えている。希望者を募って行うので、生徒の興味に応じて選択できるようにしていく。しかし、生徒から目をどれくらい離すことができるかや保険の問題もあるのが課題である。

二つ目は、「イベントスケジュールワークショップ」である。現在も地域の方からイベントの情報をいただいているが、学校行事や他の行事との兼ね合いで生徒や教員が不足していることがある。年度当初にイベントの年間スケジュールを決定しておくことで、計画的に行事に参加することができる。また、三崎高校がハブになることで、他団体からの依頼も受けやすくなる。今年度は、2月23日に第1回目を実施した。

三つ目は、「jobフェア in みさこう」である。高校2年生と大学2年生を対象に伊方町・八幡浜市の企業を呼び、合同企業説明会を行うものである。現在、大学に行った生徒がどうしているのかを調査できていない。当時の担任が転勤の場合、探ることが難しい現状である。地元の企業のことを知れば就職したい人等、Uターン生が増えるように手を打つためにも実施をしたいと思っている。会の始めには大学生に研究発表を行うことで、高校生が大学の魅力を知ることができたり、大学との連携につながったりする。また、企業に対してはアピールの場になる。

その他にも「せんたんシンポジウム」の実施も予定している。以前から行っていたせんたんミーティングの進化版である。これまではローカルな視点で行っていたが、立命館アジア太平洋大学の留学生に参加してもらい、グロ

ーバルな視点で交流ができるように、バージョンアップさせていく。

新事業1年目であり、成果はあまりないが、入学生徒数は増加している。また、今年度も県外からの見学者も多い状況である。これは地域の方達の協力や地域の方の優しさのおかげでもあり、口コミなどでそのよさが広がっているからだといえる。生徒の成果としては、伊方町出身の有無に関わらず、伊方町の魅力を発信したい、よりよくしたいという思いを持つ生徒が増えていることである。また、地域の方との触れ合いを通じてコミュニケーション力の増加にもつながっている。

課題としては、新旧の交代による過渡期であり、業務の整理ができていないことがある。また、全国から入学した生徒の卒業後の連携ができていないこともある。これからはシステム化し、オンラインを活用して追っていききたい。

#### オ 研究協議

(中西教頭)

コンソーシアムとは、協力し合う仲間という意味がある。協力していただける方が多くいることに気付くことができた。本会議でお話しいただくだけでなく、これからも協力願いたい。

(佐田岬みつけ隊 黒川氏)

質問①:本事業について、一般には知られていないのではないと思うが、どうやって知らせていくのか、PR方法を知りたい。

質問②:先生の異動の引き継ぎをどのようにしていくか。スムーズにいけるようにしていただきたい。

質問③:卒業生との連携をオンラインで行うという話だが、どのように進めていくのか具体的に知りたい。

【質問①について】

(和田校長)

現在、マスコミで公表されている。学科名は仮称であるので、教育委員会と決めていきたい。決まったらプレスリリースをする。地域みらい留学を通じて知ってもらい、その県外生が口コミで広げていくことでPRをしていきたい。

【質問②について】

(和田校長)

コーディネーターと連携をしていく。授業の中で地域の教材を取り入れるので、教科書を軸に地域教材を取り入れていくことで、スムーズにできると思う。

(中西教頭)

教員の負担にならないように報告書を作っていく。また、Prima Pinguinoの方と協力をして簡単なシステムを使って残せるようにしていきたい。

(津田教諭)

【質問③について】

(津田教諭)

専修大学の大崎ゼミの学生と協力して、遠くにいて関われない人と関わられる機会を設けるように考えている。具体的な運用方法は決まっていな

い。

オンライン同窓会については、卒業時にメール等で登録を行い、いつでも情報が入るようにする。例えば、町の広報をデータ化して情報発信を行っていく等の取組を行う。

(大崎氏)

大学に入ってから徐々に関係が希薄になる。大学生になってからも関係を途絶えさせないために、大学1・2年のまだ関係の濃い時期にやっていくことで希薄化を防ぐことができる。現在、大崎ゼミでは、社会人基礎力を身につけることに取り組んでいる。アポイントメントやメールのやり取りを練習して実践できるようにすることやマーケティングで大学生の学びを生かして高校生と連携する等が考えられる。現在は試行錯誤中である。

(石本コーディネーター)

オンラインの補足であるが、三崎高校を支援する会である花橘会の会員をデータ化し、メーリングリストにしようとしている。花橘会をHPやFacebookで発信し、メーリングリスト化に取り組んでいきたい。

(増田氏)

三崎高校のプロジェクトで商品開発班のBBQソースと万能型ソースが印象に残っており、それをジビエの方と協力をして行うこともよいのではないか。カフェ班は伊方町各所で行ってほしい。ツアー班の地蔵班については、ミニ四国88か所に興味を持っており、同じ志を持っているので連携したい。これからは二名津わが家亭での民泊やイベント、ジビエ料理の発表会などにおいて、高校生が地域にもっと入ってほしい。

(松岡氏)

三崎高校でも企業セミナー、金融教育セミナーを行ってきた。しかし、学校行事との兼ね合いで、積極的にできなかった。イベントスケジュールワークショップを活用して金融教育やセミナーも入れていきたい。

伊方町の博物館ができる。高校と博物館がタッグを組んで、何かのイベントを開催するのもよいのではないか。

(津田教諭)

三崎高校3名が、町見郷土館のミュージアムガイド養成講座に参加している。物販はどういう施設ができるかがわからないので、何か連携をしていきたい。

(黒川氏)

博物館にはミュージアムショップができるので、何か連携できるのではないか。また、地域活動の部屋を三崎高校に使っていただくのもよいと考えている。

(中西教頭)

高校生を活用していただけることをありがたく思っている。

(岩田氏)

現在、海ごみ問題の活動を行っている。愛南町で25日間のゴミ拾いを行った南宇和高校、愛媛大学の学生、愛媛大学附属高校の生徒と行った。伊方町の二名津港の恋の浜(こいのはま)でゴミ拾いを行う計画を立てて



いる。4月14～17日の9時から16時である。ゴミ拾いは大人たちが行う。その日程の前後10日間でイベントを行うことも考えている。恋の浜は瀬戸内海で5本の指に入る程ごみが集まっている場所である。このイベントを通じて海ごみ問題を考えるきっかけになってほしい。まずは、大人たちが参加し体験してもらい、それを子どもたちにどのように還元していくのかを考えてほしい。

(中西教頭)

時間となったのでこれで終了としますが、何か御意見がありましたら是非よろしくお願ひしたい。

カ 閉会行事

(校長挨拶)

本日は成果発表から長時間ありがとうございました。

1年間の取組は手探りだった。横道にそれそうなときはみなさんの御協力により正しい道に戻ることができた。魅力のある楽しい夢のある学校づくりを行っていききたい。今後とも協力をお願いしたい。

### 3 管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について

#### (1) 職員体制に関する支援

- ア 小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員の配置
- イ 本校出身の優秀な教職員の配置や、本校勤務年数が長い経験豊富な教員の配置

#### (2) 取組内容に関する支援

- ア 生徒のグローバルな視点の習得支援（未咲輝塾によるトビタテ！留学 JAPAN 応募にいたる指導）
- イ 生徒のコミュニケーション能力の向上支援（県教育委員会によるえひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の参加支援）
- ウ 伊方町による本校地域活性化に関する特別授業における講師謝礼、旅費の令達
- エ 伊方町による本校地域連携探究活動（せんたん新聞、せんたん book 制作）印刷物制作費用全額補助
- オ 一般社団法人佐田岬Sプロジェクトによるブイアートプロジェクトにおける活動支援
- カ NPO法人さだみさき夢希会による「みっちゃん大福」の普及及び販売活動（特産品の開発）における活動支援
- キ 愛媛大学による「アサギマダラ」の研究（地域資源活用プログラム）及び合同ダンス制作（情報発信）、エネルギー教育事業（課題解決カリキュラムの開発）における活動支援
- ク 専修大学による「総合的な探究の時間」における活動支援
- ケ 佐田岬みつけ隊による歴史や文化を中心とした地域研究活動（地域資源活用プログラム）における活動支援
- コ NPO法人二名津わが家亭による地域活動拠点の提供
- サ 株式会社伊予銀行による企業教育支援

(3) 成果普及のための支援

えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（1月31日、発表と意見交換）発表校、パネルディスカッションパネリストとして参加

(4) 運営に関する支援

ア 運営指導委員会の開催

年2回実施（9月20日、2月15日）

イ コンソーシアム代表者会議の開催

年2回実施（9月20日、2月15日）

ウ えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（発表と意見交換）1月31日実施

## Ⅲ 研究開発

## 1 事業の実績

### (1) 事業の実施日程

事業項目	実 施 日 程		
コーディネーターの配置	令和4年8月1日		
運営指導委員会	令和4年9月20日	令和5年2月15日	
コンソーシアム	令和4年9月20日	令和5年2月15日	
オンライン・コンソーシアム	令和4年11月24日	令和4年11月25日	令和4年11月30日
令和6年度教育課程委員会	令和4年5月19日	令和4年9月20日	令和5年12月23日
	令和5年1月13日	令和5年1月23日	令和5年2月9日
未咲輝学Ⅰ「地域理解」	令和4年7月7日	令和4年7月8日	令和4年7月14日
	令和4年9月21日	令和4年9月29日	令和5年1月17日
	令和5年1月26日	令和5年3月9日	
未咲輝学Ⅱ「RESAS」	令和4年6月～		
未咲輝学Ⅲ「起業に向けて」	令和4年6月～		
みさこう郷土芸能	令和4年9月～		
エネルギー教育	令和4年9月22日	令和5年1月19日	令和5年1月26日
	令和5年2月6日		
みさこうフェスティバル	令和4年9月23日		
中学生1日体験入学	令和4年10月22日		
企業説明会	令和4年11月8日		
高校生SRサミット 「FOCUS」参加	令和4年11月11日	令和4年11月12日	令和4年11月13日
令和4年度えひめスーパー ハイスクールコンソーシアム	令和5年1月31日		
県外視察研修	令和5年2月2日	令和5年2月3日	
未咲輝-SENTAN-発表会	令和5年2月15日		
アウトソーシング ワークショップ	令和5年2月21日		

### (2) 成果及び課題

#### ア 地域魅力化コーディネーターの配置

令和4年8月1日から雇用。他県での教職経験や一般企業での海外勤務経験などの幅広い経験を生かし、校内外を問わず、新事業に係る校内諸行事の企画立案や外部人材との連絡・調整などを行っている。具体的には、来年度からの「総合的な探究の時間」や学校設定科目「未咲輝（みさき）学」（以下未咲輝学という。）のアップデート、地域探究活動に関係する新しい学校設定科目の立案、地域特別講師データベースの構築などを行っている。また、本校教員や生徒が共に、本校の魅力を全国の中学生に向けた発信をするなど、精力的に活動している。

本校にコーディネーターが配置されたことは初めてのため、コーディネーターの仕事の範囲が不明確である上に1名のみでの配置であるため、様々な分野の業務が集中して負担が大きくなってしまふという課題が見られた。その一方で、周囲の教職員もどこまでの仕事を依頼

してよいのかが分からず、遠慮してしまい連携がスムーズに進まなかった面も見られた。今年度は、延べ 15 人の教職員がコーディネーター研修等に参加したが、来年度以降も校外研修等に積極的にしたり、校内研修を開催し全教職員の共通理解を図ったりするなどし、一層の連携を推進していきたい。

#### イ 運営指導委員会

本年度は2回開催し、事業の運営や実施状況等につき専門的見地からの指導・助言、成果に関する評価をいただいた。特に第2回の運営指導委員会では、活発な意見交換がなされ、本事業を推進する上で大きな原動力となった。

本年度においては、各種授業等において協働することができた運営指導委員の方もいるが、全体の一部にとどまっている。来年度は、より多くの委員の方に授業や行事において協働できるよう、各活動の計画段階から綿密に連絡を取り合うなどして、積極的な連携の在り方を模索したい。

#### ウ コンソーシアム代表者会議

本年度は2回開催し、これまで築いてきた協力体制を再確認できた。また、本関係者は、「総合的な探究の時間」や「未咲輝学」、特別授業など日頃から積極的に教育活動に参画している。本事業においては、本校の特色である地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、「総合的な探究の時間」や「未咲輝学」以外の各教科の授業においても、コンソーシアム関係者に積極的に参加していただくことになっている。また、学校外での活動では、地域行事やインターンシップなど、地域探究活動における生徒の受け入れをコンソーシアム関係者に依頼する計画をしている。

#### エ オンライン・コンソーシアム

年2回の対面による会議だけでなく、オンラインツールを利用して授業の打ち合わせや諸行事の案内など定期的に連絡を取り合うことで、事業の円滑な推進を行うことができた。

来年度は、より活発な意見交換ができるよう、連絡を取る頻度を増やすとともに効果的なオンラインツールの活用法などについても研究したい。

#### オ 校内教育課程検討会

コース編成と単位数の見直しを中心に、校内での教育課程検討会を6回実施した。（通常は年2回の実施。）

現在は就職・専門学校への進学を主としたⅠ型と、四年制大学への進学を主としたⅡ型（文科系・理科系）の2類型3コース編成であるが、新たに地域協働活動を主としたコース、人文系内容を主としたコース、科学系内容を主としたコースの3コースへと再編成した。どのコースも探究活動を学習活動の中心としており、どのコースからも進学・就職への進路選択が可能となっている。

それに合わせて運営指導委員の方から助言をいただいたり、他県の先進的なカリキュラムを参考にしたりしながら、現在の33単位から29単位まで減らした教育課提案を作成した。削減した時間に地域人材と協働して探究的な活動を行ったり、公営塾「未咲輝塾」との連携を一層深めたりするなどして、地域社会に根差した上で、より生徒一人一人の興味・関心に合わせた個別最適な取組を行っていく予定である。

また、「トライブラーニング」や「アプリ学」という新たな学校設定科目を設置し、探究活動や教科等横断的な授業を行うことで、変化の激しい社会を生き抜くことができる生徒を育てていきたい。

令和6年度には1年生と2、3年生が異なった単位数での教育課程で教育活動を行ってい

くことになる。学校行事の実施や委員会活動、課外活動等の時間の調整は課題となることが予想されるため、来年度は令和6年度2、3年生の教育課程の変更も含めてそれらの課題を解消し、令和6年度をスムーズに始められるように協議を進めていきたい。

#### カ 中学生1日体験入学

62組が参加。体験授業や在校生との座談会、面談を通して、本校と伊方町の魅力をアピールした、特に学区外（愛媛県南予地域以外）の参加者から多くの反響をいただいた。結果として、志願者数の増加につながった要因の一つと考える。

#### キ 令和4年度えひめスーパーハイスクールコンソーシアム

南予地区の先進的な取組を行っている学校の事例発表を聞いたり、パネルディスカッションに参加したりすることで本校の取組について、自分たちの考えを深めることができた。また、他校の生徒との関わりを広げることで、今後の取組において新たな連携を取る際の参考となった。

#### ク 未咲輝学Ⅰ「地域理解」

「町見郷土館」高嶋賢二氏と「佐田岬みつけ隊」黒川信義氏に講師に招き、講義やフィールドワークなどを計8回開催した。地域活動団体である「佐田岬みつけ隊」には、本年度1年生3名が参加し、自主的に地域活動に参加している（2、3年生を合わせると12名が参加）。1年生のうち2名は令和5年7月にオープンする予定の「佐田岬ミュージアム」でのガイド講座へも参加するなど、連携が進んでいる。

本年度は、地域実習に加え、原子力発電所や風力発電用風車が立地している地域の特色を生かしたエネルギー教育、身の回りの視点から始めるSDGs教育など、様々な切り口から地域理解活動を進めてきた。多くの地域人材、団体の協力を受け、密度の濃い活動を行うことができた。その一方で各授業の時間調整や外部人材とのスケジュール管理に多くの時間が割かれることにもなった。来年度は、コーディネーターをハブとした連絡体制を確立したり、それぞれの事業の振り返りを基に再度スケジュール調整を行ったりするなどして、負担感の軽減に努めたい。

#### ケ 未咲輝学Ⅱ「RESAS」

ビッグデータを活用とした地域経済分析システムである「RESAS」を活用した授業を行った。地域経済の流れや感覚で捉えるのではなく、実態を視覚的に情報収集、分析することで地域の姿を客観的に捉えることができるようになり、「総合的な探究の時間」等の探究活動を行う際にも効果的であった。

未咲輝学は、各学年団が担当しているため、RESAS担当者も毎年変更になることが多い、そのため、担当者は年度当初に使用方法を事前に習得したり、生徒への指導方法を考えたりしなければならず負担が増加するという課題が見られた。また、担当者が出張等で不在の場合に探究活動を進めにくいという場面も見られた。来年度は年度当初に校内研修を行うことで、教職員全員がRESASの使用法を習得するなどして、担当者の負担を減らす方法を検討していきたい。

#### コ 未咲輝学Ⅲ「起業に向けて」

伊予銀行と協働して金融講座や起業講座を行うなどして、実社会に即した学習となるように活動した。今後も継続的な取組を行うことで、社会とつながる効果的な学習活動になるよう、関係団体と協働していきたい。そのためにも、地域の起業家を中心としてできるだけ多くの人の話を聞くことのできる機会を増やせるよう、コンソーシアム団体等の協力を得ながら、新たなネットワークを構築していきたい。



#### サ 高校生SRサミット「FOCUS」参加

平成30年度から毎年参加している立命館宇治高等学校主催の高校生フォーラムに今年は2年生3名が参加した。

3年ぶりの対面形式での開催ということで、生徒たちは全国各地の同世代の高校生はもちろん、中学生や大学生、また海外学生とも意見交換を行い、本校のプロジェクトのブラッシュアップを行った。また、メタバースを用いた仮想空間でのプレゼンテーションも行い、そういった活動を経験した生徒たちが今後本校の探究活動の中心になってくれると期待している。

#### シ 県外視察研修

令和5年2月1日～4日の3泊4日で島根県立隠岐島前高等学校視察と海士町フィールドワークなどを実施して交流を深めた。

令和5年2月3日には、教職員3名で福島県立ふたば未来学園の成果発表会へ参加した。全国の教職員や教育関係者と授業見学や分科会での活動を通して、意見交換を行った。

県外の先進地域への視察を通して、組織作りや情報発信の仕方など様々な面で大きな成果が得られた。

#### ス みさこうフェスティバル

吹奏楽部の他に「みさこう応援団」、「みさこう体操115」などの有志生徒が参加した。地域の寺院である傳宗寺にて開催させていただくことにより、地域住民をはじめ多くの方に参観していただき、地域住民からお褒めの言葉をいただくなど生徒が自己肯定感を高める一助となった。また、学校と地域の距離がさらに近づくきっかけとなった。

#### セ 企業説明会

伊方町役場など南予地区の地元企業を中心に16団体が参加。事前の希望調査から、生徒たちが4団体のブースを回り、企業の説明を聞くことで地元企業の理解へとつながった。

来年度以降は、高校2年生及び大学2年生を対象として、伊方町を中心とした近隣市町の企業に協力してもらい、「jobフェア in 三崎高校」を開催することで地域の企業理解、ブーマラン人材の育成につなげていきたい。

#### ソ みさこう郷土芸能

地域の青年団の方に指導していただき、地域の伝統行事の伝承活動を行った。校内行事や本校主催のイベントだけでなく、地域のイベントにも多数参加した。地域を盛り上げるとともに、伝統文化継承の意義を実感する取組となった。

来年度は、地方祭が開催される予定となっているので地方祭に参加することで、本活動の目的である地域文化の継承に貢献していきたい。

#### タ 未咲輝-SENTAN-発表会

本年度は、伊方町役場大会議室にて開催した。本校関係者をはじめ、中学生や地域住民、近隣の高校等から116名にお越しいただいた。また、オンラインで配信して多くの人に参観していただくことで、本校の取組を多くの人に発信する機会となった。

これまでは「地域課題の発見・解決」を中心において探究活動を行ってきたが、本校生徒は探究活動に限らず、様々な活動を通して地域との結びつきが非常に強く、郷土愛が十分に醸成されている。そのため「地域課題の発見・解決」にとどまらず、その過程で得た知識や学びを実社会や、自分自身の興味・関心のある分野においてどう生かしていくのかということを中心とした探究活動を生徒が実施していけるよう、次年度は探究活動の在り方や校内システムの見直しを行っていきたい。

## チ アウトソーシングワークショップ

インドネシアの若き起業家 Sara Dhewanto 氏による英語での起業に関する講演会、黒川氏・高嶋氏によるフィールドワーク、未咲輝塾の先生方による科学実験、地域おこし協力隊の大木喜知氏による正しい体の使い方講座の4講座を特別講座として行った。生徒は、自分の関心に応じた講座を選択し、教科の枠を超えた学びに意欲的に取り組むことができた。

この取組を基に、令和6年度からの実施を予定している、地域人材を講師とした課外での探究活動である「みさこうゼミ」の計画をより具体的に行っていききたい。

## 2 みさこうSTEAM教育

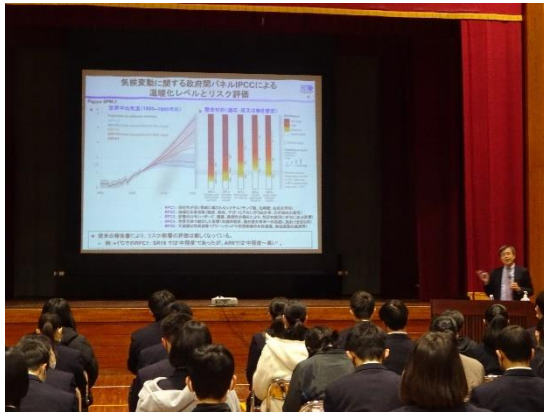
### (1) 学校設定科目「未咲輝学」

系統的かつ、持続的な地域協働活動の取組を行っていくために、令和元年度に3年間の系統的な授業を通して「ブーメラン人材」として必要な力を育成することを目標として、週に1時間、学年ごとにテーマを決めて探究活動を行う学校設定科目「未咲輝学」を開講した。本事業の指定を受け、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことのできる人材の育成、地域社会とつながる人材の育成を目指して、内容の見直しや外部人材との連携の強化を行った。

1年生は、「地域理解」をテーマに、地域の史跡・施設見学の調査・研究等や、エネルギー教育、SDGs学習などを行った。地域の特色や地域資源をこれまで以上に有効活用するために、地域の郷土館や地域活動団体、四国電力などの外部団体と連携を深め、体系的に探究活動に取り組み、専門的な助言をしてもらうことで、より深く地域理解を行うことができた。地域資源を最大限に活用するためには、実際に現地を訪れたり、見識のある人に話を聞いたりする必要性の高さを再認識した。そのために十分な時間を確保し、生徒がより多くの体験をすることのできる機会を作ることが教職員の重要な役割である。そのため、本年度は授業時間の確保や各団体との調整等に係る時間も増加した。来年度は、それらの負担を減らしつつスムーズに活動できるよう、再度実施内容の検討等を行っていききたい。

2年生は、「地域課題の発見・解決」をテーマに活動を行った。地域課題を経済的側面から考察するために、経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供しているRESAS（地域経済分析システム）を用いてグループごとにテーマを設定して、研究を進めた。その後の他の場面での活動においても、RESASを活用して情報の収集や分析を行う生徒が見られたり、他分野でのデータサイエンスを活用した探究活動を行ったりする生徒たちが見られるなど、ICT活用能力の高まりや、データサイエンス分野への関心の高まりを感じることができた。「未咲輝学」の授業は、それぞれの学年団の教職員が指導を行っている。そのため、毎年担当者が変わることが多い。そのため、年度ごとに自らがRESASの使い方を学び、生徒に指導する教員が必要となっている。また、担当者の負担増にもつながるといった課題が見られた。来年度には、校内の教職員研修でRESASの使い方について学び、全教職員がRESASを扱えるようにすることで、負担の軽減や各教科でのRESASの活用などにつなげていきたい。

3年生は、RESASを用いてビジネスプランを作成した。さらに、専門的知識を身に着けるために株式会社伊予銀行と協働して起業セミナーを開催して、起業や金融分野への理解を深めた。起業経験はもちろん、一般企業で働いた経験のある教職員がほとんどいないため、他の学年と比べてもより一層の外部人材との連携の必要性を感じた。また、地域の起業家と連携することで、地元企業への理解を深める機会とし、より地域に根差したキャリア教育を行っていききたい。そのためには、コンソーシアムメンバーと協働して、通常1年次に学年全体で同時期に行っているインターンシップの実施時期を希望制にしたり、複数企業でのインターンシップを可能にしたりするなどの柔軟な取組を検討したい。そうすることで、地域の魅力を発見し、地域の新たな雇用の場として「ブーメラン人材」の地域へのUターンを促すとともに、地域経済を支えることのできる起業家の育成を目指していききたい。



## (2) 地域社会とつながる授業

### 実践事例「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」

本校の位置する伊方町は愛媛県内で2番目に高齢化率の高い自治体であり、少子化や若者の都市部への流出が急速に進行している。そのため、産業だけではなく地域文化の後継者不足も深刻な問題となっている。そこで、地域の伝統文化を理解し、次世代への担い手となるべく「音楽Ⅰ」及び「音楽Ⅱ」の時間に、地域の青年団と協働して太鼓の演奏を通して郷土芸能の伝承活動を行った。

当初は音楽選択生のみでの活動であったが、それ以外の生徒からの参加希望が多かったため指導を受けた生徒たちも指導する側に回り有志の生徒たちに伝承活動を行った。課外の活動となったが青年団にも引き続き指導役として活動に参加してもらうことができた。残念ながら地方祭は新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、3年連続で中止となってしまったが、本年度は、その披露の場として本校文化祭で「唐獅子」「五つ鹿」「浦安の舞」の3演目を実演した。三崎地区の住民にとって、秋祭りは地域のアイデンティティとも言える重要な地域行事である。秋祭りが中止になり、寂しい思いをしていた地域の人にこちらの想像以上に喜んでもらい、感動や激励の言葉を多くいただいた。

高校生にとっては、実践的に地域理解を進めるとともに自分の出身地域の文化等についても関心を高めるよい機会となっている。また、地域にとっても文化を継承していくことができるというメリットがあり、相互に好循環が生まれつつある。地域の伝統芸能の伝承活動を行うことは、ブーメラン人材の育成においても大きな意味を持っていると考えている。

伝統文化の継承というと大掛かりな取組のように聞こえるが、教科の特性を生かした連携活動を行うことで、生徒も気負いすることなく楽しみながら活動することができていた。来年度は地方祭が実施される予定であるので、地方祭への参加を目標として、文化の担い手として恥ずかしくない演技をするとともに、更に下の世代にも文化を伝えていけるような活動としていきたい。







### (3) 教科等横断型授業

#### ア 実践事例1 「現代の国語」×「総合的な探究の時間」

「現代の国語」における表現活動として、新聞を作るという単元があった。そこで、生徒の興味・関心を基に少人数のグループを作成し、地域新聞の作成を行った。テーマは「三崎高校の歴史」や、「三崎地区の秋祭りについて」「農家さんにインタビュー」など多岐にわたっていた。フィールドワークやインタビューを行うには「現代の国語」の時間だけでは不十分であると考え、それらの活動は「総合的な探究の時間」に行い、編集作業を「現代の国語」の時間に行った。新聞の作成は、生徒が愛媛県から貸与されている一人1台端末で行い、マイクロソフト Teams 上のフォルダに提出することとした。新聞完成後は、全ての班がプレゼンテーションを行うことで、全体での情報の共有を行った。

生徒の意欲が非常に高く、もっと深く調べたいという声も多かったため、発表終了後は「総合的な探究の時間」を使って、作成した新聞の追加取材を行い各班で模造紙にまとめた上で再度全体での発表を行った。新聞の作成も発表も2度目ということもあり、どの班もより質の高い発表を行うことができていた。作成した模造紙は、文化祭や探究活動の発表会の際に会場に展示することで、多くの人に見てもらった。

初めての試みであったが、「総合的な探究の時間」や地域人材との連携もスムーズに行うことができた。「調べる時間」と「まとめる時間」を別にすることで、生徒はそれぞれの活動の目的を理解した上で活動に取り組むことができたように感じた。また、教科等横断授業を行う際に、「総合的な探究の時間」を利用することが非常に効果的であると感じた。



#### イ 実践事例2 「数学 I × 地学基礎」

地域の特徴的な石材である緑色片岩（通称青石）が、伊方町すべての地下に埋まっていると仮定し、既習の公式などを用いてその埋蔵量と価格を計算するという授業を行った。生徒たちは、数学の考え方を実生活の中に当てはめることにより数学を身近なものとして捉えるとともに、地域の地形や地質に関心を持つきっかけとすることができていた。

#### (4) 国外・県外フィールドワーク

##### ア トビタテ！留学 JAPAN 参加生徒報告（3年生 梶原 凜）

私は英語を学ぶために2週間ハワイに留学しました。新型コロナウイルスの影響で世界が大変な時にこのようなチャンスをいただいたので、いつも以上の感染対策を心掛け、留学に出発しました。

私の留学目標は、「凜として、私！～Rin Kajiwaraの孵化計画～」です。この目標を達成するために「1.英語をツールとして使うこと」「2.自分の殻を破ること」「3.今まで学んできた平和学習を生かすこと」を行うと決めていました。

1つ目の目標を達成するために、分からない単語があってもすぐにスマホ等で調べず、相手に「その単語知らないから教えて」と尋ねることを決めていました。留学期間中、このことを意識し、日本語を使うこともほとんどありませんでした。英語をコミュニケーションのためのツールとして使うことができていると思います。私自身、こんなに英語を使った日々は初めてでとても楽しかったです。留学の最後には、ホストファミリーが「あなたは、最初より断然英語が話せるようになってきているよ！」や「会話するのに全然問題ないよ！」と言ってくれました。なかなか自分の思いが伝えられない状況に悔しさもありましたが、周りからそう言われてとても嬉しかったですし、自信につながりました。

2つ目の目標を達成するために、自分のことを周りの人に積極的に話すよう心掛けました。高校に入学して以来、「自分なんか」と一歩引いていた自分にサヨナラしたかったです。日本のことや愛媛のこと、そして、梶原凜のことをたくさん伝えました。写真などを使って私が行ったことのある日本の場所についてホストファミリーに紹介したり、今の日本の状況を話したりしました。それによって、一緒に住んでいるスイスやドイツやフランスからきた留学生も自国の事も話してくれて、いろいろな国の文化や状況も知ることができました。同時に英語をツールとして使うこともできたと思います。

3つ目の目標を達成するために、ホストマザーに日本とアメリカの戦争についての話をしました。すると、真珠湾攻撃のこともえひめ丸のことも知っていたみたいで、その場で「明日そこに行こう！！」という話になりました。翌日には、アリゾナ記念館とえひめ丸の慰霊碑に連れて行ってくれました。後から友達に聞いた話ですが、こんなに留学生と共に行動してくれるホストファミリーはいないらしいです。アリゾナ記念館には、真珠湾攻撃で日本軍が攻撃したアメリカの戦艦が今でも沈んでいます。私が住む伊方町には真珠湾攻撃の砲撃練習場所となった公園があります。中学校の時に学習したことを覚えており、いつかアリゾナ記念館に行つてアメリカ側からも真珠湾攻撃について学んでみたいという気持ちがあったので、ホストマザーに誘ってもらってとても嬉しかったです。実際に現地に行くとたくさんの観光客がいました。実際に沈んだ船を見ると、海の底から船のガソリンが浮き上がってきていて、昔に起きた事件という感じがしませんでした。今もこの船の下にはいくつかの遺体があるかもしれないのに世界では新しい戦争が今日も起きている現状に心が痛くなりました。他にも「えひめ丸」の慰霊碑がたっている場所にも連れて行ってくれました。えひめ丸は愛媛県にある宇和島水産高校の実習船の名前です。実習中に沈んでしまい、たくさんの生徒が亡くなってしまいました。私はこれまでにえひめ丸事件について学習する機会がありませんでしたが、この留学をきっかけに調べてみようと思いました。日本の外側に居るからこそ、日本についてより深く学びたいと思うことも留学の素晴らしさだと思います。えひめ丸事件の慰霊碑にはみかんの木も植えられていて、「愛媛」を感じました。

この留学ではハプニングがたくさんありました。最初に入国検査で引っかかってしまいました。税関から「ホストファミリーの家のアドレスは？」という質問をされた時のこ

とです。すべての留学情報が携帯の中に入っていて、その場で答えることができなかった私は、「携帯の中にあるから」と携帯を見せようとしてしまいました。しかし、電波が入らず見せられませんでした。パニックになっているところを税関には怪しまれてしまい、なんと別室に連れていかれてしまいました。頭が真っ白になりました。いろんな資料を必死で見せましたが、どれも認めてもらえず、泣きそうになりました。最終的には現地の学校に電話してもらい、確認が取れ、なんとか入国することができました。

次にバスです。私はホームステイをしながら学校に通いました。ホストファミリーはカリヒという街に住んでいました。学校のあるワイキキからは少し離れていたため毎日往復で4回もバスを乗り換えなければいけません。しかし、私は日本でバスに乗ったことがなく、乗るために何をしたらよいのかも分からない状態でした。そんな私を救ってくれたのは、一緒に学校に通っているホストファミリーのお姉ちゃん（以下、シスターズ）とGoogle マップです。シスターズは、何番に乗ってどこで乗り継ぐのかを詳しく教えてくれました。特に、毎日同じ時間の授業を受けていたフランスのお姉ちゃんは、毎朝私を待っていてくれて一緒に乗ってくれました。帰りはそれぞれ終わる時間が違うので一人で帰らなければならず、とても不安にしていたら初日にシスターズがインスタグラムを交換してくれて何かあったら連絡するようにと伝えてくれました。優しいシスターズのおかげで少し安心しました。

しかし、そんなに簡単にバス問題を解消することはできませんでした。初日の帰りは、乗るバスの番号は合っていたものの、バス停の場所を間違えてしまいました。マップを見ていると何か違うと思い運転手の人に聞いたら、「バス違うよ」と言われてすぐにバスを降りました。そこからどうしたらよいのか分からなかったため近くにいた中国の方にどうすればよいか聞きました。すると、バスを調べてくれて私がバスに乗れるまで見送ってくれました。本当にありがたかったです。その人のおかげで無事家に帰ることができました。2日目は、乗り換えるバスを間違えてしまい、何キロも離れた場所に行ってしまいました。この日は私自身の体調がよくなかったため、ホストマザーにも「今日はすぐに帰るよ」と連絡していました。けれど、結局帰ったのは連絡して3時間後でした。家に帰ると、「どうしたの？」ととても心配されました。昼ご飯は自分で用意しなければならないルールですが、何も食わずに帰ってきた私にホストマザーは日本のラーメンを作ってくれました。とても温かくて疲れた私の心も体も癒してくれました。次の日はバスに乗れない私のことを聞いたホストファミリーと一緒に乗ろうと言ってくれました。授業が終わってからホストファミリーの一人がやって来て、「友達とこれから海に行くから一緒に行こう！」と誘ってくれました。私は友達がなかなかできず悩んでいたのもとても嬉しかったです。友達が車で迎えに来てくれて一緒にビーチに行きました。放課後にのんびりビーチを見ながら過ごすという事は今までにしたことがなかったので新鮮でした。帰りも車で送ってくれて最後まで楽しい時間を過ごすことができました。そして、留学に来て4日目について迷うことなくバスに乗ることができました！とても嬉しかったし、ホストファミリーも安心してくれました。バスに乗れるまでたくさん失敗していろいろな方々に助けをいただいたのおかげで自分としても成長できたと思うし、たくさんの人とつながることができました。他にもパンを焦がして火災報知器を鳴らしてしまったり、バスが発車する5分前に起きてしまったりなど慌ただしい日々でした。

そんな中でも一番苦労したことは「友達作り」です。私のクラスにはフランス人が半数以上いて、既にグループになっていたため、私はなかなか友達が作れませんでした。他の人は学校終わりに友達と遊んで帰っていましたが、私は友達もできなかったのですぐに家に帰っていました。ホストファミリーにも、「友達できた？」や「家に帰りたいんじゃない



ない？」と言われました。友達はできないし、バスは間違えてしまうし、この時期の私は自分自身に失望し、本当に悔しかったです。自分が理想としていた留学生活ではないのに、なかなか変わることができない自分が嫌で、毎日毎日泣いていました。しかし、学校では私に声をかけてくれる日本人もいました。友達ができない私を「一緒に海に行こう」と言ってくれたり、ランチに誘ったりしてくれました。その人のおかげで初めてワイキキビーチに行けたし、サーフィンも体験することができました。

そんな日々を変えてくれたのが、同部屋の日本人の存在です。彼女は私よりも5歳年上で本当のお姉ちゃんみたいな人でした。初めて会った日から、いろんな話ができるほど心の広い人でした。初めて会ったときに「友達できた？」と言われ、「できていないです」と答えたら、「じゃあ、今週の日曜日お出かけしよう！」と誘ってくれました。私に友達ができないことを相談したら、いろんなアドバイスをくれました。自分が何のために留学に来たのか、何がしたかったのか、改めて考える機会になりました。それから、自分から他の留学生に積極的に声をかけるようになりました。そんな私の尊敬するお姉ちゃんとその友達と私の3人で日曜日にショッピングに行きました。私は、「週末に友達とショッピング！」に憧れていたのでワクワクが止まりませんでした。アラモアナショッピングセンターという巨大ショッピングセンターに連れて行ってもらいました。私が洋服を買いたいと言ったら、お勧めのお店に一緒に行ってくれました。その後、お昼ごはんも一緒に食べ、学校の話をしたり留学の話をしたりなど私がしたかった憧れの留学生活をすることができました。

だんだんハワイでの生活に慣れてきた頃に、私は体調を崩してしまいました。コロナウイルスが流行している中だったので、とても不安でした。日本にいる家族や先生にも連絡をしてどうしたらよいのか聞きました。同部屋の方は漢方薬をくれましたが、なかなか熱が下がりませんでした。そんな時にホストマザーがあるアメリカの薬をくれました。ネットで調べてみると、どうやらアメリカで「最強の薬」らしく、すぐくまらなかったですが、それを飲んで2時間ほど寝るとすっかり元気になりました。熱も下がり、頭痛や鼻詰まりなども無くなりました。慣れないところに行くと水が合わなかったり急に熱が出たりなど大変でしたが、周りにいる人のおかげで乗り越えることができました。

ハワイに行ったらカルチャーショックもたくさん受けました。まず、治安の悪さです。ハワイは「海や街並みもとてもきれいなところ」というイメージが強かったのですが、実は治安が悪いのです。街には、ホームレスがたくさんいます。特にチャイナタウンには至る所にホームレスの人がいました。また、ある日、ホームレスの人がバスに乗ろうとすると運転手の人が「汚い！」と大きな声で叫んでいる場面に遭遇しました。言われたホームレスの人はすごく怒っていましたが、最終的にはバスから降ろされていました。私は他の乗客のことを考えると乗せてあげられないのは理解できますが、そのホームレスの人が可哀そうで仕方がなかったです。ハワイではこのようなことが日常茶飯事らしいです。今まで持っていたハワイのイメージとは真逆の現実を目の当たりにしてすごくショックでした。ホストマザーに「なんでこんなにハワイにはホームレスの人が多いのか？」と聞いたところ、「ハワイの物価が高いこと」や「ワイキキは暖かいから外でも頑張れば生きていける環境なこと」が関係しているのではないかとっていました。

次にバスが時間通りに来ないことです。日本において公共交通機関に対する安心感は絶対で、時間通りに来ることが当たり前のように感じます。しかし、ハワイでは時間通りにバスが来ることのほうが少ないです。バスに乗り慣れていなかった私には試練でした。また、これはカルチャーショックなのかは分かりませんが、朝のバスは毎回満員です。座るところがなく1時間立ちっぱなしもありました。今まで体験したことがなかったので

窮屈でしたが、これも留学の醍醐味だと思います。

また、ホストマザーはフィリピン出身の人だったので日本の暮らしと似たような生活をしていました。日本にもとても興味がある方で私が日本の話をするとても嬉しそうに聞いてくれました。私はホストファミリーの人に茶道を体験してもらい、日本食にも挑戦してもらいました。みんなとても嬉しそうに体験してくれたり食べてくれたりして、私もすごく嬉しかったです。ホストマザーは「日本食はフィリピンの食べ物みたいに体によい食事なので好きなんだ」と言ってたくさん食べてくれました。また違う国から来ている留学生の人たちも「日本の文化学びたい！」と言ってきて、すごく興味を持ってきていました。

留学中は、ハワイでしかできないことをやろうと考えていました。学校が開催しているアクティビティは毎日ありましたが、帰る時間を考えるとどれも参加することができませんでした。私の住んでいるところは夜7時以降に外に出ると危険だと言われています。私は自分の身を守るためにアクティビティに参加しないという決断をしました。その代わりに自分でアクティビティを作り出そうと思いました。自分がビーチに行った時に現地の人に声をかけてみたり、海にいるサーフィンを教えてくれる人に声をかけてサーフィンを教えてもらったりなどできる限りのアクションを起こしました。他にも学校の先生をお願いをして選択授業にハワイで有名なウクレレの授業を入れてもらいました。私は日本で少しウクレレをやっていたので少しは弾くことができましたが、みんなとても上手で隣の人に教えてもらいました。自分から行動を起こすことの大切さもこの留学を通して学びました。

この留学で私はたくさんの人に感謝しなければならないと思っています。留学中も何も分からない私をたくさんの方がサポートしてくれました。私に関わってくれた一人一人に感謝しています。私は留学中たくさんの人にお世話になったので、今度は私が誰かを助けてあげられるような人になりたいと思います。早速、帰りの飛行機から行動しました。帰りの飛行機で隣になった人はハワイ出身の病気がちの男性でした。移動中に足が痙攣し、慌てて薬を持ってトイレに駆け込んでいました。体調がよくなかったみたいですが、誰にも言うことなくただ苦しそうでした。「なんとかしないと！」と思いました。私はできる限りの英語でCAさんに男性の様子を伝え、気にかけてもらうようにしました。後から男性に「ありがとう。自分は病気を持っているんだよ。大丈夫だからね。」と言われました。CAさんにも感謝され、自分もいい気分になりました。他にも、羽田空港では道に迷っていた韓国の方に道案内をしました。ちょっとしたことですが、人に感謝され、自分でもすごく嬉しかったです。

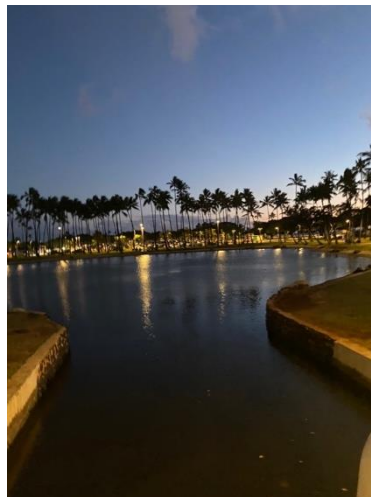
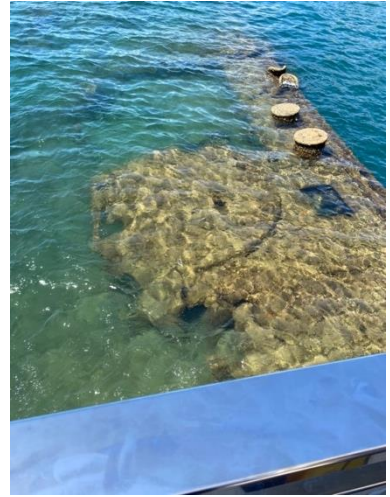
この留学で「ありのままの自分を出すことの大切さ」を強く感じました。日本にいた時は、「誰に何か言われるかもしれない」と自分を隠していました。そんな自分はすごく嫌いでした。今回の留学では、素の自分を出していこうと決めて行動しました。結論から言うと、「ありのままの自分を出すことは楽しかった!!!」です。困ったときにはたくさんの方が私を助けてくれて、自分がやりたいことを伝えると応援してくれる人がいることを実感しました。知らない土地に来て私も一人じゃないと感じました。誰も私のことを否定しませんでした。例えば、日本では自撮りの写真を上げると自意識過剰じゃないかとか自分の事がすごく好きなのだから、よくも悪くも様々な声が上がります。私もそういう環境で生活してきたのでなんだか窮屈でした。しかし、留学して、日本の外ではみんなオープンでした。みんな町中でたくさん自撮りもします。みんな自分をありのまま見せてくれます。私はそんな中で生活してみて、生活しやすいと感じました。自分を出すことが怖かった自分はいつの間にか消えていました。それは周りの人がみんな優しくよい人だ

からだだったと思っています。留学を終えて、私は「一皮剥けた！」気がします。この留学で、失敗もハプニングも嬉しいこともたくさん体験しました。正直に言うと、行く前は留学の準備が忙しく留学に行くんだ！という実感はなかったです。それでも、ハワイで過ごした2週間は私にとって貴重な2週間でした。私が体験したことをこれからたくさんの人に伝えてみんなにも一歩外の世界へ踏み出してほしいと思います。

最後に留学に行かせてくださった方々に感謝しています。ありがとうございました。







## イ One Young World summit 2022 参加生徒報告（3年生 農守 未佳）

私は日本代表団の一員として、そして、同時に、伊方町・三崎高校の代表としてイギリスのマンチェスターで開催されたOne Young World summit 2022（以下OYW2022）に参加してきました。研修を終えた今だからこそ参加して本当によかったと思えますが、参加を決断する前はあまり前向きではありませんでした。多額の費用がかかることや英語が上手じゃないのに一人で海外に行くこと、そして、新型コロナウイルス感染症が世界中で流行しているなど様々な不安がありました。しかし、たくさんのサポートのおかげで不安よりも参加してみたいという思いの方が強くなりました。先生方や家族のサポートはもちろんですが、中でも伊方町が参加費の半分のサポートしてくれるというのは本当に大きかったです。ただでさえお金のかかる受験期にOYW2022に参加できたのは伊方町からのサポートがあったからです。本当に感謝をしております。また、英語に関しても先生から「話せることが正解じゃない」という言葉をいただき、気持ちがかなり軽くなりました。最後の不安であった新型コロナウイルス感染症に関しては、行ってみないとわからない、またこの状況で海外に行けるチャンスの方が貴重だと思い、挑戦することを決意しました。

校内での選考を通過し、いよいよ東京での壮行会に参加しました。周りに大人しかいない会場で、ドキドキしたことを覚えています。会場ではたくさんの人が話しかけてくださり、三崎高校のことや参加する経緯などを話すことができました。また、同行する企業の方々や大学生と連絡先やSNSを交換することができ、よいつながりができました。

壮行会も終わり、準備を進めているとすぐにマンチェスターへの出発の日になりました。その日は高校の体育祭の日でもあり、友達とお互いに「頑張ってね！」と励まし合って出発しました。経由先のドバイでは英語を勉強したり、ごはんを食べたりして10時間ほど待機しました。日本から遠く離れた国行くことを改めて実感しました。そして、ドバイからマンチェスターに行く飛行機では、おそらくマンチェスターに住んでいる人がサッカーの試合を見て一喜一憂しており、日本の飛行機では考えられないくらい騒がしくて面白かったです。長いフライトも終わり、空港の駅に向かうときに一階に駅があると書いてあるのにどこを探してもなく、近くにいたおじさんに声をかけても一階にあるよと言われとても困惑しました。そこで、日本とイギリスでは「階」の数え方が違うことを思い出し、ようやく駅に着くことができました。その国の文化や慣習の違いなどをもっと学んでおくべきだと思いました。空港からマンチェスター市内に移動したときには夜になっており、一人で大きなキャリーケースを押しながら歩くのは怖かったです。やっとの思いで前泊するホテルに着くと、ほっとしたのか気がついたら眠りについていました。

次の日にはホテルをチェックアウトして、そのままOYW2022が開催される会場へと向かいました。しかし、さすがに大きなキャリーケースは持っていけないと思い、先にホテルに向かいましたが、チェックインすることや荷物を預けることができませんでした。後になってわかったことですが、私はホテルの受付の場所を間違えていたようです。その時の私は訳も分からず、日本団のサポートの人に連絡し、もう一度会場に行きやっとう荷物を預け、会場に入ることができました。ホテルに行く前に会場で荷物預けることが可能か質問したらよかったという反省や、自分一人だと何もできないと思い悲しくなりました。それと同時に質問することや人を頼ることは悪いことじゃなく、とても大切なことだと思いました。そんなことを思いながら会場に入ると、中はとても広く、肌や目の色、言語も異なる世界中の人々がいて圧倒されました。OYW2022のボトルをもらい、様々なブースを見ていると「本当に来ることができた」という感動や達成感が生まれました。その日の夜にはオープニングセレモニーが行われる予定でしたが、それまで時間に余裕があったので、マンチェスター大聖堂に行きました。昔の建物がこんなにきれいな状態で残っていることに驚き、マンチェス

ターという町を少し知れたような気がしました。その後も町を散策し、イギリス人の喫煙率の高さや歩きたばこの多さにびっくりしました。無事ホテルにチェックインし、壮行会で知り合った大学生の方々と待ち合わせてオープニングセレモニーに向かいました。コンサートを行う会場だけあってとても広く、人の多さに驚きました。各国の代表者が国のフラッグを持ちステージに上がったり、ヘンリー王子やメーガン妃が登場したりと大盛り上がりで本当に楽しかったです。当たり前のことですが、飛び交っている言葉はすべて英語で必死にくらいついていきました。

2日目は朝から壮行会で一緒だった大学生と同じホテルだったので、一緒に朝ごはんを食べ、サミットに向かいました。OYW2022では、いろんなことが同時に行われます。スピーチが行われる会場やオーディやイケアが主催するディスカッション会場、企業のワークショップブースがあり、それぞれのビジョンに合わせて、その時聞きたい話を聞くことができたり、見たいものを見たりすることができたりします。さらに会場は出入り自由なのでサミットに参加せず観光する人もいました。私は世界中のヤングリーダーがスピーチを行う、一番大きい会場に行き、一日中スピーチを聞いていました。そこでは、日本の代表企業であるアサヒビールのCEOがスピーチを行いました。トップバッターで日本の企業が出るのはうれしかったです。しかし、それに続くスピーチでは英語を聞き取ることができず、悔しい思いをしました。その中で一番記憶に残ったスピーチがあります。それは、一人の女性ヤングリーダーが学校に行くことができない子どもたちのために太陽光エネルギーを活用して動く教育機器を発明し、教育を世界中の子どもが受けられるようにしようとしているというスピーチでした。実際にその機器は一つの言語だけでなく、様々な言語に設定できるようになっており、世界基準で作られているのだと感動しました。生まれた場所によって教育の質に格差がある現代社会において、この活動は素晴らしいと思いました。それと同時にやっぱり学校という場所や先生がいる環境の大切さについて考えることができました。様々な問題をまずは世界規模で考え、次に自分がいる環境だったら何が大切かを考える、この視点や問題との向き合い方はとても大切だと思いました。非常に学びの多い一日になりました。

2日目には、たくさんの人と話をすることができました。ランチの時にたまたま一緒の席になったチュニジア人の方が会話に入れなかった私に声をかけてくれて、流ちょうではない私の英語をゆっくり聞き取ろうとしてくれました。その親切心に涙が出そうでした。また、ある人とは将来の夢の話になり、まだ私には夢がよくわからないと話すと、「それでもいいんだよ。これからいろんなことを体験することが大事だから」と話してくれ、国籍や言語関係なく伝わるものがありました。夕食の時もずっと一緒にいた大学生と違うレストランになり、どうしようかと思っていると、インドの女性とラオスの女性の方が一緒に行こうと誘ってくれたり、写真を撮ってくれたり、レストランへの道を間違え迷子になっているときも「大丈夫だよ」と声をかけてくれ、人の暖かさに触れました。レストランに着くと宗教やビーガンで食べられないものがある人のために多様なメニューが準備され、多様性を感じました。

3日目は朝食の時間にこれまでの学びを振り返る時間を取りました。この時間があっただけで新しい学びや考えをより深くインプットできたと思います。その後は午前中のスピーチを聞きに行きました。ラグビー選手がスポーツを子どもたちに教える取組についての話や、より平等な医療環境を達成するための方法についての話など、専門的な言葉が多く難しかったですが、スピーカーの方全員が熱意と情熱を持って現状をよりよくしようとしているのを肌で感じ、胸を動かされ、自分も自分以外の誰かのために働きかけることが大切だと思いました。午前のスピーチを聞き終え、一人でランチを食べていると一度話したこと

のある日本の参加者が私のところにやってきてくれて、三崎高校の取組や自分の過去についての話をしました。またその方を通して岡山大学の先生と学生さんとお話をさせてもらいました。普段の高校生活では絶対に出会うことのなかったであろう人々とこんなに簡単に会って話ができるOYWはすごい！と再認識し、貴重な経験をしていると思いました。岡山大学の先生は今までOYWに参加した三崎高生を知っており、とても話しやすくOYWに参加して教育に関することに取り組みたいと思っていた私の話を親身になって聞いてくださりました。

その日は他のブースを見て、早めに会場を出てPCR検査を受けるために電車に乗ろうと予定を立てていたのですが、結局会場を出るギリギリまでお話をさせてもらいました。会場を出て空港の検査場まで向かうために電車に乗りました。空港から市内に行くときにはもう日が暮れていて景色が見えませんでした。その時は昼間だったこともあり、イギリスの雰囲気やゆっくり味わいながら電車に乗れました。PCR検査の検査場に到着、あっという間に検査を終えました。新型コロナウイルス感染の心配をしていたので、「陰性」の二文字に安心しました。

4日目、サミット最終日の朝も友達になった大学生と朝食を食べました。PCR検査の結果が陰性だったことを伝え、「最終日悲しいね」という話をしました。そして、今日の予定を確認して会場に向かいました。この日も最初だけスピーチを聞きました。そのあとすぐに3日目に話した岡山大学の先生からの提案で急遽、中継でつないでいた岡山にいる方々に向けOYW2022に参加して感じたことや思ったことを伝えることになりました。急なことではありましたが、高校生代表として堂々と話すことができましたと思います。

最終日には、事前に予約していたワークショップに参加しました。私が参加したワークショップは2020年以降のWEB3といわれるウェブ上でのバーチャルリアリティを活用し、デザインや音楽関係のプロの方と直接つながり、専門的な知識を若いうちから学べるように活動している企業のワークショップでした。私も教育には興味がありましたが、現在身近に存在するウェブやバーチャルを活用して学ぶ機会を作るという試みは新鮮で勉強になりました。また、様々な分野においてその専門家と関わる機会の少ない日本の教育にも、このような技術を活用することで学びの機会が広がると思いました。

ワークショップの後はクロージングセレモニーがありました。大学生の方がゲートで待っていてくださり、一緒に大きな会場に入りました。プロのミュージシャンの歌を聞いたり、OYWを支援している企業の方々の登壇があったりと、参加者全員が盛り上がっていました。その時隣で一緒に参加していた方が「エリザベス女王が今、亡くなった」と教えてくれました。本当に突然なことで大学生の方と困惑していると、司会の方からそのことを伝えられ、エリザベス女王の映像が流されました。そのあと黙祷が行われ、セレモニーをここで中断すると伝えられました。サミット中に感じる事のなかった空気感が流れ、参加者が神秘的な顔で会場から出ていく様子を見て、イギリスという国においてエリザベス女王様の存在の大きさを思い知らされました。その後のアフターパーティーに向かう道中も日本の企業の方々と今回参加した経緯や参加してみた感想を話しながら会場に向かいました。初日のパーティーと比べるとだいぶ人は少なかったですが、それでもたくさんの人が参加していました。会場ではアサヒビールのビールが提供され、騒がないようにと言われていましたが、騒いでいる方も中にはいました。イギリスの食べ物で有名なフィッシュアンドチップスを食べ、語り合い、写真を撮りました。最後によい思い出ができて本当によかったです。私はお酒が飲めないので、ずっと一緒にいた大学生の方と早めにホテルに戻りました。ホテルに戻る途中の道の電子パネルにはエリザベス女王の写真が映し出されており、本当に歴史的な瞬間に立ち会っているのだと再認識しました。ホテルに着くと、2日目に友達になっ



たチュニジアの方が待っていてくれ、チュニジアのキーホルダーをプレゼントしてくれました。私も日本のお土産を持ってきておけばよかったと思いました。OYW2022 を通してたくさんの人に出会えてよかったです。無事サミットが終わったことに対して安心もあり、寂しい気持ちもありました。

9月3日に日本を出発して10日に帰国するまでの一週間、たくさんの学びがあり、そしてたくさんの方の優しさに触れられました。最初こそ参加することに不安がありましたが、参加し終えた今は挑戦できて本当によかったと思います。岡山大学の先生が「失敗は挑戦したからある」という言葉をおっしゃっていました。当たり前のことですが、失敗を何よりも怖いものと思っていた私にとってすごく心に響きました。OYW2022 に参加して自分のやりたいことを見つけることができました。興味のある教育の分野で不登校の生徒や学校に合わないと感じている生徒がもっと生き生きと学べる場所を作りたいと思いました。そして、そんな子に、学校に行けなかった私が三崎高校に行き、OYW2022 に参加できたという経験を知ってもらい、何かのきっかけになってほしいと思います。正解や自分の枠にとらわれるのではなく、広い視野を持ち、フィルターを通さずに物事や人を見なければならぬと今は思います。まだまだ未熟な私には難しいことですが、いろんなことに挑戦して、そんな人間になってみせます。

最後に、私がOYW2022 に参加できたのは、たくさんの思いがあったからだと思います。三崎高校が全国の高校でたった一校を持っていたことも、伊方町がお金を負担してくださるのも、両親が「未佳がやりたいことなら」といってくれたのも、全て誰かが誰かを思ってできたことだと思います。本当にありがたいことです。三崎高校からのOYW参加者3人目になれたこと、光栄なことだと思います。この経験を糧にこれからもたくさん学び、挑戦したいと思います。







## ウ 全国SRサミット「FOCUS」

### (ア) 目的

他校の高校生と各校のプロジェクトの課題について協働で取り組み、その解決策を検討することを通して、互いに学び合う機会とする。そして、生徒が社会の一員として目指す社会について考え、どのように社会貢献できるかを考える。

### (イ) 期間

令和4年11月11日（金）～14日（月） 3泊4日

### (ウ) 研修先

11月11日	・ 京都自主研修
11月12日	・ 立命館宇治高等学校
11月13日	・ 立命館宇治高等学校

### (エ) SRサミットの目的について

- ① 他校の高校生とSDGsに関わる各校のプロジェクトの課題について協働で取り組み、その解決策を検討することを通して、互いに学び合う機会とする。
- ② 生徒が社会の一員として目指す社会について考え、どのように社会貢献できるか考える機会とする。
- ③ 教員もこのフォーラムへの参加を通して、互いの取り組みについて共有し学び合う機会とし、今後も学校での取り組みを継続的に発展させるための方策を模索する。
- ④ 産学協働プロジェクトに発展させるべく、今回のつながりをさらに発展させる契機とする。





## (オ) フォーラムの内容

### a プロジェクトについて

三崎高校からは「CRI-HOUSE プロジェクト～高校生が創るコワーキングスペース～」というプロジェクトを提出した。

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、日本だけでなく世界の人々の働き方は大きく変化した。テレワークを推奨する企業の数も増え、コワーキングスペースやサテライトオフィスの需要は高まっている。そこで、本校独自の授業である「未咲輝学」の授業内で高校生が空き家を改修するプロジェクトを立ち上げ、地域の方々や建築系の大学生と協働してコワーキングスペースを作り上げる仕組み作りを行いたい。増え続ける空き家問題を解消するためには、既に存在する空き家を改修することはもちろんであるが、その町を魅力的なものにすることで移住・定住者を増やす必要があると生徒たちは考えた。最終的には、伊方町が「高校生が運営するコワーキングスペースがある町」として、多くの企業や起業家、大学生に注目される町になればと考えている。

### b FOCUS Week



FOCUS の特徴として、全国の高校生がそれぞれのプロジェクトについて「混ぜり合っ  
て」、探究活動を進めていく点が挙げられる。そのため、実際に立命館宇治高校で行  
われるオフラインのセッションの前に、オンライン上でのアイスブレイキングやブレ  
インストーミング等を行う週が設けられる。これが FOCUS Week である。FOCUS Week で  
はタイガーモブ株式会社や認定 N P O 法人 very50 の方々にオンライン上でワークショ  
ップを企画していただき、メンバーのプロジェクトに対する認識を一致させた。

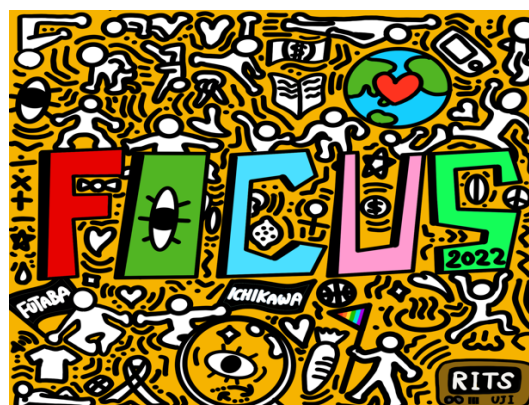
### c フィールドトリップ (自主研修)



フィールドトリップでは、宇治市を中心に視察を行った。平等院鳳凰堂では、紅葉の季節ということもあり、多くの観光客であふれていた。宇治の町には、至る所で抹茶を使った産物があったことが印象的であった。抹茶を使ったスイーツや飲み物はも

もちろん、そばの中に抹茶が入っているものもあった。それだけではなく、自販機ではお茶しか売られてない自販機があり、その土地を象徴するものを様々な形でアピールすることの大切さに気付かされた。

#### d FOCUS



まずフォーラム全体の概要の説明があった後、タクトピア株式会社の長井様からPBL型の思考の方法や原因分析の方法などについて直接ご指導をいただいた。そして、実際に他校の生徒からいただいたプロジェクトについての質問点や改善点をもとに、既存の活動やアイデアをブラッシュアップした。その中には厳しい意見やフィードバックもあったが、限られた資源や時間の中で最大限の成果を得るためには、どれだけ効率的に動くことが大切かということを学ぶことができた。

その後は、各班で最終プレゼンテーションに向けた準備を行った。今回の FOCUS では、実際に立命館宇治高校に集まり、対面でプロジェクトブラッシュアップを行う生徒と Zoom 等を使ってオフラインで参加する生徒がいる。With コロナ時代の新しい試みとして、各々の生徒がタブレット等を用いてオフライン・オンラインに関係なく探



究を進めることができおり、大変勉強になった。

(カ) 生徒の感想

市川 桃佳（愛媛県立三崎高等学校 2年 東京都出身）



今回、立命館宇治高等学校主催の FOCUS に参加させていただき、大きく 3 つのことを学ばせていただきました。一つ目は、グループで自分の意見を発言することの大切さです。はじめて出会った人たちで構成されるグループで新しい案を出し合うことは非常に怖かったです。しかし、リーダーさんが困っている姿を見て、少しずつ自分の意見を言葉にするようにしました。私は自分の意見に自信が無い部分も多かったですが、「その案いいね！」などの相槌や同意の声かけをたくさん行うように努力しました。みんなで盛り上がってディスカッションすることは楽しかったです。

二つ目は、他県の高校生と交流する面白さです。私自身、人と話すことがあまり得意ではなく、いつも一歩引いてしまうところがあります。しかし、今回のフォーラムに参加してみて、一緒に参加した島本さんや松下さんはもちろん、同じチームになった高校生や会場で出会った立命館宇治の生徒さんと様々な視点で話すことで、とても勉強になりました。

最後に京都という町についてです。テレビや雑誌等で京都のことを目にすることは多くありましたが、実際に京都に行ったのは今回が初めてでした。平等院鳳凰堂や伏見稲荷大社を観光して、その外国人観光客の多さにびっくりしました。日本人はもちろん、海外の人も魅了する京都を私も好きになりました。

今回このような機会をいただいた伊方町や三崎高校には大変感謝しております。この経験を、今後の学校生活や校外学習に生かしていきたいと思います。

島本 彩音（愛媛県立三崎高等学校 2年 伊方町出身）



FOCUS 全体を通してまず感じたことは、オフラインとオンラインの空気感のギャップです。私は、今回の FOCUS でリーダーを務めました。メンバーは4人の中にはオフライン参加のメンバーとオンライン参加のメンバーがそれぞれいました。その中で、オフライン側にいる私たちがどれだけ盛り上がりつつも、オフライン側にはその空気感が伝わらないことが多く、オフライン側のメンバーの発言が少なかったように感じました。思い返せば、私も他の研修に参加した際、私1人だけがリモートになり、空気感がわからず、発言しにくかった経験があります。自分自身がオンライン側の気持ちがよく分かっているながら、リーダーとして対策案を考えられなかったことを反省しております。2月のアフターFOCUS やその他の場面で、今回の反省点を生かしていきたいです。

また、最終日のプレゼンテーションの「リーダーの決意表明」では、自分の伊方町に対する想いをしっかり伝えることができたことがよかったです。発表後にはたくさんの鋭い質問が飛んできて、正直泣きそうになりましたが、取り乱すことも無く、落ち着いて対応することができました。これも、この1年半三崎高校でたくさんの経験を積ませていただいたおかげだと思います。他の班の発表では、プレゼンテーション資料の作り方や発想力で、多くのよい刺激受けました。発表終了後、質問をしてくださった方から、対応力を褒めていただいたり、多くのアドバイスをいただいたりして、今後の活動の励みになりました。このプロジェクトを成功させ、伊方町の活性化・空き家対策につなげていきたいです。

フィールドワークでは、伏見稲荷大社・平等院鳳凰堂に行きました。個人的に行きたかった2つを見ることができ、とても感動しました。移動はバス、JR、地下鉄を使い自分で切符を初めて買いました。初めて利用するものもあったので、とてもよい経験になりました。この研修で、自分の課題点の発見や他校との交流を広げることができました。これも参加費を出していただいた伊方町のおかげです。これから、この FOCUS でできたつながりを大切に、学校生活では、得た経験を生かしていきます。



松下 姫菜（愛媛県立三崎高等学校2年 伊方町出身）



私は今回の FOCUS を通して色々なことを学びました。私はこのような活動に参加するのは初めてでした。そもそもオンライン上でコミュニケーションを取っていた人と実際に会うということも初めての体験でした。私はあまり人とコミュニケーションを取ることが上手ではなく、会場に着いた時は不安でいっぱいでした。しかし、メンバーの人たちがすごく明るく笑顔で迎え入れてくれたおかげで不安も無くなり、すごく楽しく活動を始めることができました。また、プロジェクトについて最後の最後までメンバーの人たちとディスカッションをすることができました。私は自分の意見を出すことにすごく抵抗がありました。それは自分自身が発言することに自信を持っていなかったからです。しかし、私が出した意見に共感してくれたおかげで最後には意見を出してよかったと実感しました。これからもこのように意見を出す場面が沢山あると思いますが、今回の活動を通して、共感してもらえることの嬉しさなどを感じたので、今回の経験をこれからの生活に生かしていきたいなと思いました。

2日目になり各グループでのプロジェクトの発表が始まりました。プレゼンテーションの時、緊張して言いたいことがちゃんと伝えられなかったり、視線がずっと下がったままになったりなど、自分にとって上手く発表できたと自信を持って言えるものではありませんでしたが、とてもよい経験になりました。また、FOCUS を通してチームのみんなと全力でプロジェクトに向き合ったり、楽しく他校の人と交流したりしたこともよい思い出です。これも援助をしていただいた伊方町のおかげです。この経験をこれからの学校生活に生かしていきたいです。

(キ) 引率教員による所感

日浅 理香（地域協働課）

今回初めて参加させていただき、生徒はもちろん私自身の教員生活の中でも大きな変容をもたらす経験となった。FOCUS は各校のプロジェクトに他校の生徒が入り、新たな視点を取り入れ、その内容をブラッシュアップしていくという形を取っており、生徒にとっては他県の高校生の考え方や新しいプレゼンテーションの方法等を学ぶことができた素晴らしい機会になったと感じる。また、2日間生徒の様子を見てみると、学校生活では見られない一面を見ることができ、彼女たちの新しい一面や伊方町をよりよくしたいという思いが感じられた。

河野 雄太（地域協働課）

第1回の開催から毎年参加をさせていただいているが、今回は2年ぶりの対面オフライン開催ということで、生徒たちにどのような変容が起こるのか私自身楽しみな部分が多かった。令和元年度第2回 FOCUS を経験した生徒が中心となってスタートした地域を学びの土壌とするPBL型学習「三崎高校せんたんプロジェクト」が学校及び伊方町の魅力向上の一因となり、入学者数の倍増につながったこともあり、この FOCUS が三崎高校にもたらしてくれるインパクトは大きい。

令和元年度とは異なり、県内外の多様なバックグラウンドを持った生徒たちが共生する今の三崎高校を代表した空き家改修「CRI-HOUSE プロジェクト」は、日本全国から集まったプロジェクトの中でも目を引くものがあった。日本全国で「地域おこし活動」や「地域振興」がある種のファッション化している中でも、地元の生徒と県外から来た生徒が訴える「地域を守りたい」という純粋な気持ちは誰の心にも訴えるものがあった。

この3日間を通して、生徒たちは自らが持つ課題意識を共有し、ともに深めることの大切さを学んだ。サミットが終わり、生徒たちからも他の学校ともっと協働して取り組みたいという声が挙がっている。新型コロナウイルス感染症の影響で、オフラインでのイベント実施や研修等が難しい中でも、このような素晴らしいフォーラムに参加をさせていただいた、伊方町役場の皆様には感謝の気持ちでいっぱいである。



## エ 島根県研修

### (ア) 目的

地域の自然や特産物、教育など地域資源を総合的に生かし、地域おこしに積極的に取り組んでいる海士町でのフィールドワークや隠岐島前高校での交流を通して、地域の資源を複合的に捉え最大限に生かす地域おこしの手法について学ぶとともに、新たな視点から自分たちの取組や地域を見直し、視野を広げる機会とする。

### (イ) 期間

令和5年2月1日（水）～4日（土） 3泊4日

### (ウ) 研修先

2月2日	西ノ島フィールドワーク 学習センター（公営塾）見学 隠岐島前高校授業見学・交流 寄宿舍見学
2月3日	地域・教育魅力化プラットフォーム見学

※2月1日と2月4日は移動日

### (エ) 島根県海士町について

島根県から北におよそ60キロ離れた隠岐諸島の中で3番目に大きな島が海士町である。本土からフェリーで約3時間、高速船なら約2時間の場所にある。島内内航船により、島前地域の3島（西ノ島、中ノ島、知夫里島）が結ばれている。地域全体が国立公園に指定されるほど自然豊かな地域であり、半農半漁の島として豊かな海産物や農産物に恵まれている。また、遠流の地として多くの政治犯や貴族を受け入れてきた歴史的背景があり、歌聖と慕われた後鳥羽上皇が承久の乱の後に19年間過ごしたことで、多くの俳人が訪れるようになった。伝統芸能や島料理、地区ごとに特色のある祭りなど、島ならではの文化が現在も受け継がれている。近年は行財政改革や特産品開発、高校の魅力化プロジェクトなどの独自の取り組みを行っており、約15年の間に750人以上の移住者を迎え入れている。教育の面では、学校と地域住民が手を取り合い、魅力ある「ふるさと・キャリア教育」を進め「交流と挑戦を通して、未来を切り開く自立した人間力溢れるひとづくり」を行っている。

海士町にある隠岐島前高校は海と山に囲まれた立地に加え、全国から生徒を募集し、島内生と県外生が共に生活し、学習に励んでいる。コーディネーターを4名配置し、「総合的な探究の時間」には多くの地域住民と連携を行っている。また、公営塾も整備されており、環境や取組が非常に三崎高校に近い。そのため、今回の視察を実施した。



(オ) 研修の内容

a 西ノ島フィールドワーク



海士町から船で5分ほど行ったところにあるのが西ノ島である。昔、水上飛行機があった場所で、西ノ島からヨーロッパに向けて出ていく船もあったようだ。しかし、高価なものであったため限られた人しか乗れなかった。また、かつてはお酒を作っており、有名だったという話も聞いた。西ノ島にはその昔、後醍醐天皇が島流しにあった島があり、その当時の人達が後醍醐天皇をお客様としてもてなしたことが分かる史跡が至るところに存在した。

町の郷土館に行くと、ヒオウギ貝を用いて作った作品が飾られていた。また、現在上映中の「ラーゲリより愛をこめて」の主人公である山本幡男さんの出身地であり、遺書などが展示してある場所があった。私は、ちょうど映画を見たばかりだったので大変感動したことを覚えている。

b 学習センター見学（公営塾）



第一に塾でありながら塾という名前が付いておらず、「学習センター」という名前であることに驚いた。隠岐島前高校の学習センターは、1階の共有スペースが24時間のオープンスペースになっており、勉強をすることはもちろん、地域の方々と打ち合わせをしたり、食事を取ったり、ただ「自由」なだけの場所ではないところに感動した。また、隠岐島前高校のコーディネーターの方が塾で指導をされているところも魅力的に感じた。学校内外で先生ではないの方々と触れ合える機会は貴重であり、一人の生徒に対して多くの大人が関わってくれているなど感じた。

c 隠岐島前高校授業見学・交流





隠岐島前高校の陶芸を専攻している生徒の授業を見学させていただいた。交流した生徒の中にも、三崎高校でいうところの「県外生」にあたる「島外生」という他県から来た生徒が多くいた。「休日には何をしているのか。」という質問をすると「夏なら海に潜る」「部活」などといった答えが返ってきた。交流をしながら、三崎高校と似ているが隠岐島前高校でしかできないことを休日にやって海士町を最大限に楽しんでいるということが分かった。また、公営塾の中で交流した生徒は三崎高校の取組にも興味を持ってくれた。その中で、「どうして今の高校を選んだのか」という問いについて、みんなで発表したり、隠岐島前高校の生徒は自分の写真を一枚見せてどういう写真なのかを説明してくれたりした。ある生徒は、自分の興味のある染め物の出前授業を行っている写真を見せてくれた。隠岐島前高校は、自分のやりたいことを学校の先生だけでなく地域コーディネーターの方まで協力してくれる体制が整っていると感じた。

#### d 寄宿舎見学



隠岐島前高校の男子寮を見学させてもらった。7年前に海士町の当時の予算の5%の3億円で建てられた建物で、木の温かみを感じる外観となっていた。各部屋は6人部屋で、合計約50人の生徒がここで生活をしている。この寄宿舎の最大の特徴は、単に「寮」として機能しているだけでなく、地域の人と交流できる場であるということだ。建物の1階には広い空間があり、そこには海士町の人なら誰でも入ってよいことになっている。現状はあまり地域との交流することができていないが、今後はそのスペースに地域の人を招いてイベントや座談会を開くつもりだという。寮長と副寮長を中心に、積極的にイベントの企画や広報が行われていて、どんどん寄宿舎という場が地域との交流の場になっていくのだと思う。

この寮の説明を受けた際、「自治寮」という単語を多く耳にした。隠岐島前高校の寄宿舎では、生徒が自ら問題について考え、自分達で行動して問題を解決していた。例えば、共用の机の上が汚れていた時には、机に「消しカスは捨てよう」「輪ゴムを片付けよう」などとメッセージを書いたテープを貼ることでゴミが少なくなったと言っていた。他にも、掃除をしない生徒がいる時には全体で話し合いをして、最低限の掃除はしっかりすることを決めたり、朝が弱い生徒は他の生徒が大声で起こしたりと、自分達で寮の治安を維持していた。また、部屋替えをしたい時や何か寮の中で重大なことを変えたい時には、必ず企画書を作って先生に提出していると言っていた。実際に行ってみて、50人が住む場所として非常に綺麗で整っていて、いろんなところに彼らの工夫が感じられた。三崎高校の寮でも参考にできるところが随所であり、たくさん刺激を与えてもらった場所だった。

#### e 地域・教育魅力化プラットフォーム見学



地域・教育魅力化プラットフォームは三崎高校に入学する多くの生徒も利用する「地域みらい留学」というプログラムを立ち上げた一般社団法人だ。他にも、「意志ある若者にあふれる持続可能な地域・社会をつくる」という目標のもと、各学校にコーディネーターを配置したり、新たな地域留学の形を考えたりする拠点となっている。私たちがお邪魔したオフィスは、丸い机がいくつかあって、職員一人一人のデスクがあるわけではなく、パソコン一つを持ってどこでも仕事ができる環境だった。また職員の皆さんは私服の人が多く、自由でのびのびとした職場だということが伝わってきた。

プラットフォームでは、職員の皆さんとお話をする機会を設けていただいた。私たちがからは実際に地域みらい留学を利用した感想や、県外生と生活する地元の生徒の意



見などを伝え、向こうからはこの事業を立ち上げた時の想いや、これからの方針などについて教えてもらい、非常に有意義な話し合いとなった。プラットフォームではさまざまな個性を持った方が働いていて、話を聞くのも楽しく、また、こちらの話も真摯に聞いてくださった。

最後に聞いた、今後の地域・教育魅力化プラットフォームが目指す方向が私の中で印象に残っている。今は、地域みらい留学のように、都市部から地方への動きを主に考えているが、今後はもっと大きく、地方から都市部、さらには海外へと視野を広げるなど、新たな事業の可能性を考えているとおっしゃっていた。たくさんの視点で物事を考え、地域活性化ということを実現しているプラットフォームの皆さんに多くの刺激を受けた見学となった。

#### (カ) 生徒の感想





梶原 凜（愛媛県立三崎高等学校3年 伊方町出身）

今回研修に参加して一番印象に残った場所は隠岐島前高校の真下にある公営塾です。受験生だけのスペースや会議を行うスペースなど個人的意思によって勉強する場所を選べる環境が整っていることに驚きました。また、公営塾は誰でも利用できるようになっており、地域の方々と交流できる場にもなっていました。隠岐同然高校の生徒と交流して感じたことは、自分のやりたいことができる環境にいるので、自分のやりたいことや意思をしっかり持っている生徒が多いなと感じました。特に、寮長さんの話を聞くと、任された責任の大きさやその行動力に感激しました。隠岐島前高校を見学して、地域によって学校の在り方に違いがあることが分かりました。また、地域・教育魅力化プラットフォーム見学では働く人の温かさや優しさを感じました。皆さんが仲良く話しやすい雰囲気プラットフォームを見て、私もこのような場所で働きたいと思いました。三崎高校のPR動画なども見ていただいているようで、すごく嬉しかったし、三崎高校のすばらしさを実感することができました。

崎野 穂花（愛媛県立三崎高等学校2年 八幡浜市出身）

海士町は町並みがとても綺麗で、エステまであって、来てくれる人に温かい町だなと感じました。古民家を改装した建物が多く、「古いけど新しい」という新鮮な空間でした。古民家が好きになりました。食べ物がおいしくてたくさん食べてしまいました。魚や、朝ごはん、かつ井など食べたものすべておいしかったです。3年生の梶原さんと、夜遅くまでお菓子を食べながらお話ししました。隠岐島前高校のうらやましいと感じたところや、三崎高校のここがいいなという話をしました。もちろん、自分たちのことについてもたくさん話しました。いろいろな相談に乗ってもらって、たくさんのアドバイスをもらいました。3年生とこの研修を通していろいろな話をすることができて楽しかったです。

また、隠岐島前高校の生徒の皆さんとお話することができてよかったです。隠岐島前高校の人と連絡先を交換することができてうれしかったです。隠岐島前高校の生徒さんたちは、フレンドリーで話しやすかったです。隠岐島前高校の下にある塾では、勉強する環境が整っているなど強く感じました。3年生専用の部屋があるのにはとても驚きました。古民家を改装して作られているため、屋根裏のちょっとした秘密基地間がとても印象的でした。上から下を見渡せるようになっていて眺めがとてもきれいでした。24時間開放しているスペースがあり、この地域の治安のよさが伺えました。西ノ島の研修では、ガイドさんの丁寧な説明で後醍醐天皇がどのようにしていたのか、大きなイカが取れるスポットまで教えていただきました。島根県には「ゲゲゲの鬼太郎」のイラストが至る所にあり、子どもには楽しい町だと感じました。

地域・教育魅力化プラットフォームの方々には進路についてアドバイスをいただけてうれしかったです。4日間を通していろいろなことを知れて新鮮でした。たくさんよい経験ができた研修でした。学んだことや、隠岐島前高校との関わりを生かして何かできたらよいなと思いました。

山田 光毅（愛媛県立三崎高等学校2年 東京都出身）

私自身が県外から三崎高校にきているので、視察に行く前から隠岐島前高校や地域・教育魅力化プラットフォームへの訪問を楽しみにしていた。隠岐島前高校で感じたことは、第一に地域全体から発生する地域活性化熱だ。町全体で地域おこしのための行動をしているように感じたし、三崎高校よりも地域内での交流が多いように感じた。そう感じた大きな要因が隠岐島前高校の公営塾だ。24時間地域に開いた空間があるという点、コーディネーターや塾講師を中心に地域の方との関わりを多く作っている点など、初めて見る環境が多い場所だった。また、生徒との交流においても、彼らの地域おこしにかかる熱をヒシヒシと感じた。三崎高校のよさも残しつつ、彼らの地域おこしへの工夫を私たちも取り入れることが大事だと考えている。

地域・教育魅力化プラットフォームでは、新しい時代の仕事への向き合い方や、地域みらい留学というものにかける大人たちの思いに触れた。私服、自由席の職場だからこそ、地域活性化のための事業を運営することができるのだと思った。また、地域みらい留学を使った身として、この制度のメリットを最大限活用することが今後の私の進路実現への鍵なのと感じた。全体を通して、今回の県外視察ではたくさんの有意義な話し合いや見学ができ、自分自身の成長、そして三崎高校の更なる飛躍のための新しい考え方が手に入ったのではないかと思う。今後の学校生活ではこの経験を生かして今まで以上に学校や地域に貢献できるようになりたい。

#### (キ) 引率教員による所感

山内 一輝（地域協働課）

海と山が近くにあり、島で生まれ育った生徒と県外を含んだ外部生と一緒に生活、学習を行っているという環境は三崎高校と非常に似ており、その中で様々な違いに目を向けることができた研修であった。島の街並みも整理されており、観光客や移住者の目線に立った施設や設備が多く見られた。古民家を改装した公営塾は「地域に開かれた場所」となるよう意識されており、学習スペースが24時間開放されていた。高校生だけでなく、リモートワークを行う社会人も活用していた。学生が様々な働く大人の姿を身近に感じることができ、ロールモデルとすることができる環境であると感じた。また、隠岐島前高校男子寮の1階も地域住民が自由に活用できるようになっていた。住民を招いて座談会やイベントを企画・運営を行う生徒もおり、主体的に地域と関わる姿勢が養われていた。本校生徒も、三崎と海士町の取組や設備の面を比較する視点を持って研修に参加することができていた。海士町の住民との触れ合いや隠岐島前高校の生徒との交流を通じて、今後取り入れるべき発想や活動を積極的に吸収すると同時に、現在の三崎高校の良さを再認識することができていた。

河野 雄太（地域協働課）

今回の研修を通して、隠岐島前高校の学校魅力化事業の実態とその成果を知ると同時に、海士町全体の「地域おこし」に対してのコンセプトの統一感を実感した。境港から3時間の船旅を経て降り立つ海士町の港は木の温もりを感じる作りで、訪れる人を迎え



てくれているムードがあった。近年、「移住者のメッカ」として全国にその名を轟かせているだけあって、町にはフリーWi-Fiが飛んでおり、至るところにサテライトオフィスが構えてあった。三崎高校では、全国各地からの入学生が増えることによる町の活性化を図っているが、そもそもの移住・定住者が増えるような仕組みづくりに生徒や教員がコミットしていけるようになればと感じた。また、生徒たち自身も隠岐島前高校の生徒たちと交流する中で隠岐島前高校の魅力や町の魅力を知り、三崎高校にはない便利さや豊かさを痛感したようである。しかし、そんな研修を経ても「やっぱり三崎高校がよい！」と口を揃えて言ってくれる生徒たちを教員として大切にしたいと強く感じた。

個人的にも、大学時代からの友人であった現隠岐島前高校コーディネーターである山野氏とも約10年ぶりに会うことができ、お互いに「教育」というキーワードでまた一緒に仕事をできたことを嬉しく思った。今回の研修の成果をもっと本校の探究メソッドに還元していけたらと強く思う。



(5) マリンチャレンジプログラム

# マリンチャレンジプログラム

牧田康太郎・山田光毅・成木奏  
島本彩音・加藤嶺弥・竹本市忠

## マリンチャレンジプログラムとは

中高生の海洋・水環境分野の研究を援助してくれるキャンペーン



## 今治での発表

今治にあるみなと交流センター（はーぱりー）で行われた。

みなと交流センター



屋上からは瀬戸内海を一望！！

# 魚類の同種類間における認識能力

愛媛県立三崎高等学校



## 目次

- |        |                |
|--------|----------------|
| 1.研究背景 | 5.通常状態を撮影（実験1） |
| 2.仮説   | 6.視覚奪って見た（実験2） |
| 3.研究環境 | 7.側線壊してみた（実験3） |
| 4.研究対象 | 8.まとめ          |

## 1. 研究背景

### 群れとは

一般的に**同**一種の生物の個体  
多数からなる集団



上図：アジの群れ

# 1. 研究背景

## 群れを作る理由

小魚が集まって大きな群れを作り、  
全体として大きな生物に見せかけ、  
捕食者からの攻撃を避ける。



上図：イワシの群れ

# 1. 研究背景



上図：スズメダイ 下図：アジ



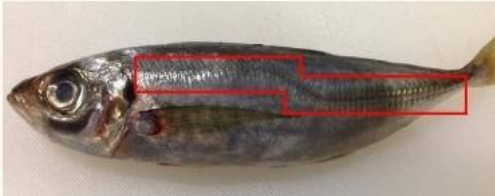
スズメダイの群れにアジが1匹



魚類はどここの器官で種類を識別  
しているのか

## 2. 仮説

視覚と側線の機能によって種類を判別している



上図：側線の位置を表す図

### 側線とは

魚が水中で水圧や水流の変化を感じ取る感覚器官

## 2. 仮説

1. 側線で他個体を認識

上図より

2. 視覚で同種だと判断

下図より

側線と視覚の相互作用  
により群れを形成

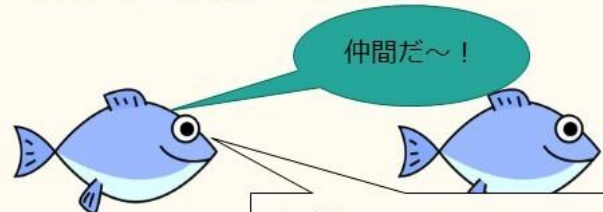
※側線は魚類が水中で水圧や水流の変化を感じ取るための器官。通常は左右に一本ずつある。

1. 側線で近くの魚の水流をキャッチ



側線を利用している

2. 視覚で全体像をとらえる



視覚を利用している

### 3. 研究環境

研究場所：漁協が使っていた施設

水槽：縦1.4m横2.4m高さ0.7m

約2000L

常に海水を循環

上図：水槽の様子  
下図：ポンプで海水をくみ上げている様子



### 4. 研究対象

魚種	個体数	大きさ
アジ	14	15~25cm
サバ	1	20cm
スズメダイ	28	10~13cm
イサキ	1	22cm



## 4. 研究対象

アジ：14匹

スズメダイ：28匹

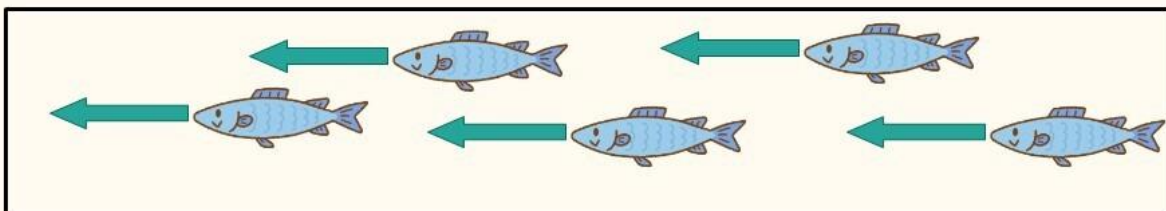


サバ：1匹

イサキ：1匹

## 群れの定義

- 5匹以上の魚が離れていても、動いている先頭の魚を他の魚が追っている（参考文献に時間の指標は無し）



この図は5匹の魚が動いている先頭の魚を他の魚が追っているので群れを形成しているとする。

【参考】

## 5. 実験 1

### 【観察方法】

明るい場所で動画を撮影して観察！

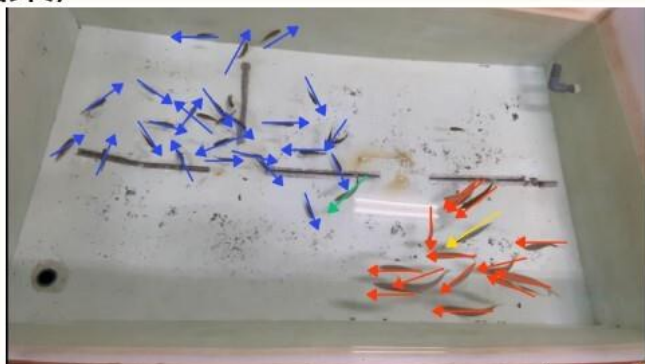
### 【条件設定】

- 撮影中は水流を止める
- 観察条件を揃える（撮影の時間帯）
- 撮影中は近づかない



## 5. 実験 1

〈結果〉



**赤**：アジ  
**青**：スズメダイ  
**黄**：サバ  
**緑**：イサキ

それぞれ色で  
区別している。

**アジ**と**サバ**、**スズメダイ**と**イサキ**で群れを形成

図1：水槽内の様子

## 5. 実験 1 の結果

アジとスズメダイはそれぞれ、別の群れを形成



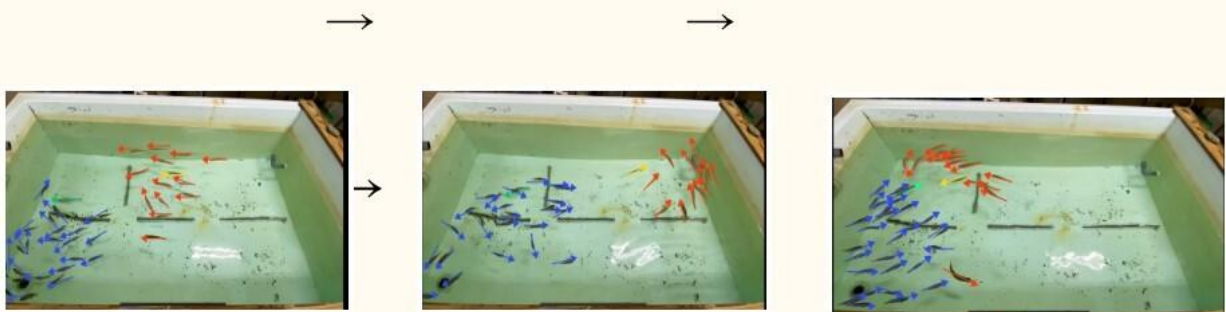
上図：水槽内の様子

アジの群れ←サバ

スズメダイの群れ←イサキ

## 5. 実験 1 の結果

5秒間隔で撮影



それぞれ群れを形成しながら移動

## 疑問

- 視覚が機能しない場合、  
魚類の行動に変化が  
あるのか



- 暗闇の条件をつくり  
視覚を機能させない

視覚を使えない  
状態なら？



## 6. 実験 2

### 【観察方法】



図 1



図 2

窓枠に遮光カーテン（※ 1）を貼り付けて日光を遮断

トレイルカメラ（※ 2）で実験1と同様に観察

※ 1 遮光カーテンは紫外線を通さないカーテン。

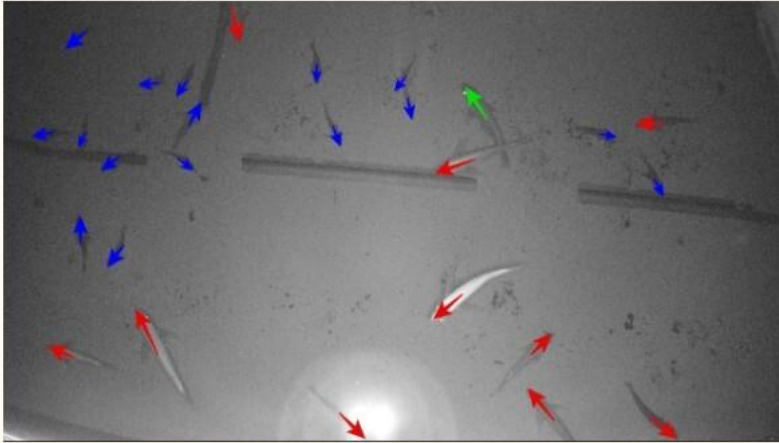
※ 2 トレイルカメラは動物の熱を感知して自動で撮影するカメラ。  
赤外線センサーを搭載しており、熱を発生する物体がセンサーの感知エリア  
内を移動すると、シャッターが作動して撮影を行う。

図 1：遮光カーテン  
図 2：トレイルカメラ



## 6. 実験 2

〈結果〉

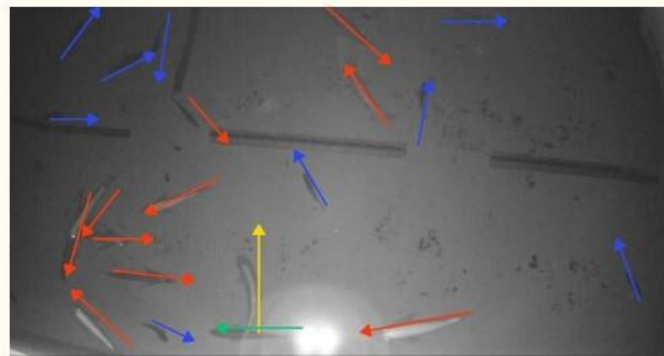


赤：アジ  
青：スズメダイ  
黄：サバ  
緑：イサキ  
それぞれ色で  
区別している。

左図：トレイルカメラで撮影した  
水槽内の様子

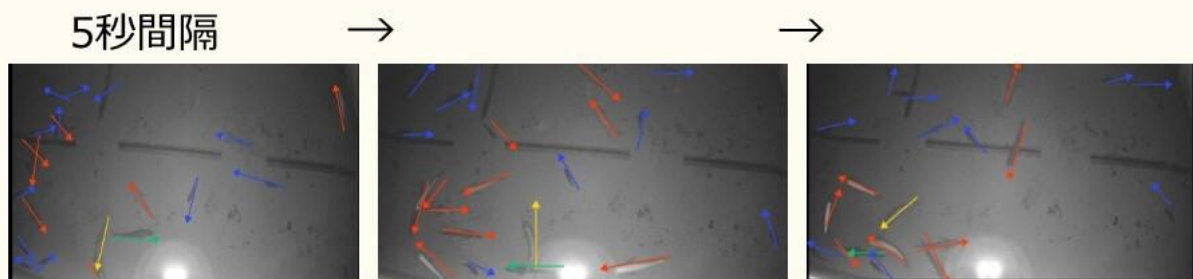
## 6. 実験 2 の結果 群れができない。

同種で近くに



上図：トレイルカメラで撮影した水槽内の様子

## 6. 実験2の結果



どの魚種も群れを形成していない

### 実験 1. 2 からの考察

- ・ 魚は**視覚**に頼って他個体を認識し、同種で群れを形成している。

## 実験 1. 2 からの考察

- ・同種類で近くに

魚同士の間が狭まると同じ方向に泳ぐ。



側線も群れの形成に関係しているのではないだろうか。

or

嗅覚で同種だと判断しているのかも。

## 7. 実験 3

### 実験方法

側線部分をカッターと包丁を

用いて切除し、

行動を観察する。



- 個体の識別のためエラ蓋に赤色の糸

左図：アジの側線を切除した 右図：スズメダイの側線を切除した

## 7. 実験 3 の結果

赤 : アジ

青 : スズメダイ

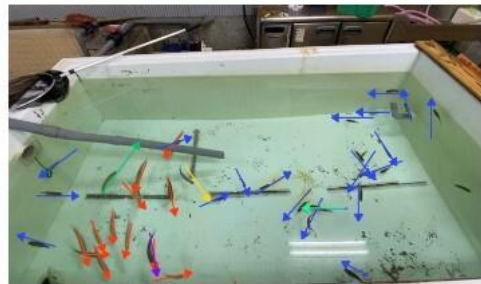
黄 : サバ

緑 : イサキ

紫 : 側線を切ったアジ

黄緑 : 側線を切ったスズメダイ

上・下図 : 水槽内の様子



## 7. 実験 3 の結果

### 同種類で群れを形成する

- ・ サバはアジの群れ
- ・ イサキはスズメダイの群れ
- ・ 方向転換遅い  
→側線の機能が必要？



上図 : 水槽内の様子



## 8. まとめ

群れの形成 → 視覚の機能が重要

実験2より 魚の視覚を奪うと、群れを形成しなくなることから。

側線の機能 → 周りの状況の把握

実験3より 側線の機能を奪うと、側線を切除した魚だけ方向転換するのが遅くなったことから。

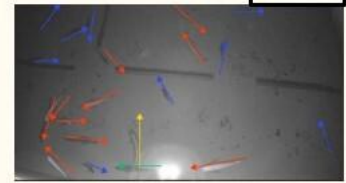


図1



図2

図1：実験2より トレイルカメラで撮影したもの  
図2：実験3より 側線を切除した魚を交ぜて撮影したもの

## 今後の活動

- 塩化コバルトを用いて側線の実験
- 視覚と側線を両方奪った状態での実験
- 数値での研究データ
- 嗅覚に着目した実験
- イサキ、サバの行動の理由

## 参考文献

魚の群れ行動の研究

<https://gakusyu.shizuoka-c.ed.jp/science/sonota/ronnbunshu/h30/183169.pdf>

静岡県立富士宮東高等学校

## 謝辞

本研究を進めるにあたり

日本財団 様

北里大学 宮木 直 様

株式会社リバネス 滝野 翔大 様

愛媛県立三崎高等学校 教員 時國 雅史 先生をはじめ多くの先生方にご指導いただきました。また三崎漁協 阿部 吉馬 様に研究の環境を提供していただきました。ありがとうございました。

## 発表会に参加した感想

- ・ 同じ世代の研究仲間と交流できた
- ・ 専門家の詳しい意見を得られた
- ・ 研究量不足を実感した

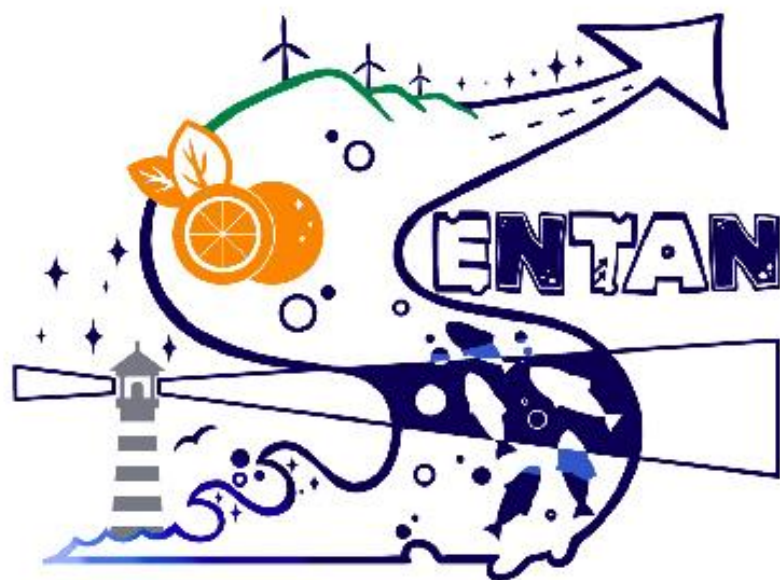


## 研究してみた感想

- ・ 空いた日に友達と研究ができて楽しかった
- ・ 研究予定を実現することが難しかった
- ・ 長期にわたって研究を続けることが大変だった



# 未咲輝-SENTAN-発表会



知らないことだらけ、知りたいことだらけ、の私たち。  
「うみ」と「そら」と「かぜ」と、この場所ではか出会えない人に出会い、  
この場所ではか見ることのできない景色を見てきた私たち。  
時代の最先端で、環境に言い訳せず、私たちができることをやっていきます。

日 時： 令和 5 年 2 月 15 日(水)  
会 場： 伊方町役場 6 階大会議室  
オンライン： 三崎高校 Facebook ページ (QR コード)  
主 催： 愛媛県立三崎高等学校





## 三崎高校「せんたんプロジェクト」

### ビジョン：



### スケジュール 2月15日（水）

#### <各種成果発表～「SEN」～>

- 11：05～11：10 開会行事
- 11：10～12：10 各種発表
- 12：10～12：15 諸連絡

#### <各プロジェクト発表～「TAN」～>

- 13：20～13：25 諸連絡
- 13：25～14：50 プロジェクト発表
- 14：50～15：10 休憩
- 15：00～15：20 閉会行事

## 「SEN」【各種成果発表】



### 県外視察研修（京都府宇治市）報告

立命館宇治高校主催高校生 SR サミット FOCUS に参加して

22R 市川 桃佳 島本 彩音 松下 姫菜

### 海の応援隊「のぼり旗プロジェクト」

えひめ海ゴミ0チャレンジ！長浜高校との協働プロジェクト

(発表者) 22R 牧田 康太郎 山田 光毅  
(デザイン) 22R 浅野 由梨香 森近 瑞名



### マリンチャレンジプログラム 21'

魚類の同種類間における認識能力～なぜ群れを形成できるのか～

22R 加藤 嶺弥 島本 彩音 竹本 市忠 成本 奏  
牧田 康太郎 山田 光毅

### この町のために私ができることプロジェクト

足と頭を使ってこの町のためにそれぞれが行動してきた1年間

21R 井上 芯 大田 純誠 高須賀 優里







## OYW summit (One Young World)

世界ユースサミット One Young World (以下「OYW」という)は、世界約190ヶ国(2021年ドイツ・ミュンヘン大会での実績:190ヶ国以上、約1,800人)から、各国を代表する次世代の若いリーダー達(18~30歳)が一堂に会する世界最大級のサミットである。

OYWは、世界が直面する地球規模の課題に対し、世界的指導者達の下、次世代リーダー達が連携して問題を解決するための全世界合同学生連携の次世代リーダー育成プロジェクトとして、その規模とネットワークを急速に拡大し続けている。

OYWは、2009年の世界経済フォーラム「通称ダボス会議」(World Economic Forum、本拠:スイス・ジュネーブ)において宣言され、2010年ロンドンで第一回サミットが開催された。これまでにチューリッヒ(2011)、ピッツバーグ(2012)、ワハネスブルグ(2013)、ダブリン(2014)、バンコク(2015)、オタワ(2016)、ボゴタ(2017)、ハーグ(2018)、ロンドン

(2019)、ミュンヘン(2021)と11回のサミットが世界の各都市で開催され、2022年はイギリス・マンチェスターにて催される。国連前事務総長コフィ・アナン氏やグラミン銀行創設者モハメド・ユヌス氏をはじめ、首相・大統領、政府関係者、全世界から500以上のリーディング・カンパニー、文化・スポーツ界、メディア界、NGO、起業家やアーティストなど、様々な分野を代表する世界的指導者や著名人などがOYWカウンセラーとしても支援している。三崎高校では、グローバルな視点で通用する「実践知」を涵養する教育の観点から、日本人のアイデンティティを形成し、自分の考えを語ることができるコミュニケーション能力、自らの置かれた立場で、自ら現場で適切な判断ができる能力を備えたグローバル人材を育成するため、日本の高校生で唯一OYWへの生徒派遣を行っている。

## 「TAN」【三崎高校「せんたんプロジェクト」】

部門	班	コンセプト	活動内容（例）
イベント	カフェ	みさこうカフェを運営する。	みさこうカフェのトータルプロデュース、サービスの提供及び運営
	防災	防災意識を高めるための啓発活動を行う。	防災訓練の実施、防災意識啓発ゲームの作成
商品	商品開発	地域の特産品を生かした新商品を開発し、販売する。	地域の柑橘類や海産物を利用した新商品の開発、看板等の制作
	ツアー	ツアープランの作成やガイドマップの製作を通して、伊方町の魅力を発信する。	伊方町・佐田岬半島の魅力を伝えるための学校オリジナル観光ガイドマップの製作、旅行プランの作成
情報発信	アート	地域資源を生かしたアート作品を作成する。	防潮堤の壁画作成、未咲輝ロードの修復及び美化活動、映像作品の制作
	PR	メディアを活用し、地域や高校のPR活動を行う。	三崎高校広報用 Facebook の運用、地域PR動画の作成、みさこう体操115の普及
	マイプロ (3年生のみ)	グループでの活動を発展させ、個人でテーマを設定して探究活動を進めていく。	パーソナルポートフォリオの作成、業界人へのインタビュー



## 2022 年度を振り返って

<前期>

4月

- ・新任式、始業式
- ・入学式、入寮式
- ・対面式、部紹介
- ・生徒総会



5月

- ・はなはな祭り参加
- ・保小中高合同防災訓練
- ・生徒会企画「みさこう交流会」



6月

- ・全国募集用 PV「誰でもない、君だけの色で。」公開
- ・県総体
- ・せんたんプロジェクト始動



7月

- ・地域理解研修（1年）、遠足（2年）、修学旅行（3年）
- ・軟式野球県大会
- ・クラスマッチ
- ・トビタテ！JAPAN 留学7期生事後研修
- ・終業式
- ・県外中学生バスツアー



8月

- ・インターハイ（卓球男子）
- ・OYW Japan 主催 StudentPitch（日本代表スピーカー）
- ・はなはな癒しマルシェ、瀬戸夕凧まつり
- ・愛媛県高等学校家庭クラブ研究発表大会
- ・生徒・PTA合同草刈り
- ・マリンチャレンジプログラム 21（中四国代表校）
- ・始業式



9月

- ・地域みらい留学用 PV「The next story is YOU」公開
- ・体育祭
- ・One Young World summit 2022（マンチェスター）
- ・生徒会選挙
- ・北海道鶴川高校交流会
- ・みさこうフェスティバル
- ・さくらプロジェクト



<後期>

10月

- ・修学旅行（2年）
- ・愛媛県原子力防災訓練
- ・中学生一日体験入学
- ・能楽体験（2年）
- ・おおいたうつくし感謝祭
- ・広島県立大崎海星高校訪問



11月

- ・文化祭
- ・なんよ BBQ フェスティバル in 松野
- ・合同企業説明会
- ・校内持久走大会
- ・県外視察研修（京都府宇治市）高校生 SR サミット「FOCUS」
- ・えひめ海ごみ0チャレンジ！「のぼり旗プロジェクト」
- ・高等学校総合文化祭



12月

- ・次世代に贈る！日本農業遺産「愛媛南予柑橘農業システム」フォーラム
- ・家庭クラブ総会
- ・第2回防災避難訓練（地震火災防災）
- ・伊方町人権フェスタ（2年生）
- ・高校生釣ってきばいて甲子園
- ・はなはなイルミネーション点灯式
- ・クラスマッチ
- ・終業式、家庭クラブ役員任命式



1月

- ・始業式
- ・開校記念行事校内スピーチコンテスト
- ・森林林業教室（2年）・伊方原子力発電所見学（1年）
- ・えひめスーパーハイスクールコンソーシアム
- ・県外視察研修（島根県海士町）



2月

- ・エネルギー教育教室（1年）
- ・みさこう Café オープン
- ・未咲暉-SENTAN-発表会



## IV 評価・分析

# 1 ルーブリック

年度当初の4月と年度末の2月に、全校生徒を対象にルーブリックによる探究活動の自己評価を行った。年度当初は、ほとんどの生徒がすべての項目において、C評価が50%以上、B評価が30%程度と

いう評価であった。しかし、一年間の活動を通して大幅な成長が見られるようになった。各項目においてC評価が大幅に減少し、A評価以上の評価がおおむね40%を超えるなど、生徒の大幅な変容が見られた。また、各項目においてわずかではあるが熟達レベルであるS評価をつけている生徒もおり、リーダーシップを発揮することのできる生徒の増加が見られた。1年生は、地域理解・自己理解に多くの時間を当てているため、自分たちでプロジェクト学習を企画・実践する時間が多くなかったこともあり、4月、2月ともにやや低めの評価をしている生徒が他の学年に比べると多かった。2、3年生は、4月の時点でA評価を付ける生徒も見られるなど、これまでの積み重ねによる成長が見られた。外部人材との協働や探究活動を通して、生徒の力が伸長したことはもちろん、成功体験の積み重ねが、生徒の自己肯定感を高めたことも影響しているのではないかと考えられる。

令和4年度 みさこう・せんたくんプロジェクト ルーブリック		( ) R ( ) 番 氏名 ( )		評価理由	
学習成果	レベルC	レベルB	レベルA	レベルS	評価理由
計画力	初心者初級者レベル <知識・理解>	自立・学習者レベル <応用・分析>	熱心・取組者レベル <統合・普及>	4月	2月
	サポートを受けながら、プロジェクト全体の概要を理解している。	自分のプロジェクトに必要な情報を収集し、自ら計画を立てることができる。	自分のプロジェクトについて、現状や実現性を客観的に分析し、修正することができる。	71%	初めての取組だったため、なれるまでに時間がかかってしまった。情報収集する際も先生に頼ることが多かった。(C)
	71%	28%	1%	2月	2月
	24%	46%	28%	2月	2月
判断力	初心者初級者レベル <知識・理解>	自立・学習者レベル <応用・分析>	熱心・取組者レベル <統合・普及>	4月	2月
	サポートを受けながら、自分の地域の特色を理解している。	自分の地域の現状や課題について必要な情報を収集し、適切に判断できる。	プロジェクト進捗のために総合的な情報に基づき、主体的な立場で客観的に判断することができる。	61%	プロジェクトを達成するために何が必要か、どこを改善すればよいかを考えて行動することができた。(S)
	61%	31%	8%	4月	2月
	40%	38%	16%	2月	2月
実践力	初心者初級者レベル <知識・理解>	自立・学習者レベル <応用・分析>	熱心・取組者レベル <統合・普及>	4月	2月
	サポートを受けながら、プロジェクトの目的と自分の役割を理解し、知識や経験を活用して、実践を応用して自発的に行動している。	プロジェクトの状況を観察し、目的の達成のために臨機応変に行動することができる。	プロジェクト全体を総合的に把握して、これまでの経験を生かしながら、リーダーとして活動することができる。	58%	自分がすべきことは何かというところが理解できていなかった(C)
	58%	36%	4%	4月	2月
	23%	42%	31%	2月	2月
調整力	初心者初級者レベル <知識・理解>	自立・学習者レベル <応用・分析>	熱心・取組者レベル <統合・普及>	4月	2月
	プロジェクトチームのメンバーには、様々な立場や意見があることを知っている。	多様な意見や立場の違いを理解し、周囲の人々や物事との関係を調整することができる。	幅広い年代の入り、自分とは異なる意見の人など、どの様な人とでも協働して活動することができる。	51%	先生や地域の人がいるという人々の意見を自分の意見に取り入れて設立、協力しながら活動することができた。(S)
	51%	36%	12%	4月	2月
	23%	29%	39%	2月	2月
プレゼンテーション	初心者初級者レベル <知識・理解>	自立・学習者レベル <応用・分析>	熱心・取組者レベル <統合・普及>	4月	2月
	プロジェクトの内容を理解し、相手に伝えることができる。	自分が伝えたいことを適切に伝えるための方法を学び、相手に伝えることができる。	相手に情報を伝えるだけでなく、他者を動かすことができるようにコミュニケーションをとることができる。	64%	プレゼンテーションを活用し、たくさんの方の中から自分も伝えたいことを発信し、他のメンバーと新しい企画を行うことができた(S)
	64%	27%	8%	4月	2月
	23%	32%	39%	2月	2月



## 2 目標と実施状況

本事業の研究開発開始時に三つの目標を設定した。

一つ目として「生徒による3年間の地域探究活動を通して、地域を担う人材としての資質・能力の向上度100%」という目標を設定した。目標設定の考え方としては、本構想における地域の課題発見、解決に向けた、主体的・協働的な取組により、地域を担う人材としての資質・能力を身に付けることができたかを、成果物の作成や情報活用能力の向上等を通して評価するとともに、学習内容の確実な定着を図ることとしている。本年度は、地元中学校教職員・保護者対象アンケートや、株式会社いよぎん地域経済研究センターが実施したアンケート等の集計結果を分析したところ、該当項目において概ね良好な回答結果となっていたため、80%という評価とした。来年度は、新学科設置の前年度ということもあるため、生徒の資質・能力の向上に加えて更なる情報発信に努め、本校生の変容を広く周知していきたい。

二つ目として「大学等進学者のうち地域創生関係の大学・学部等への進学者数50%」という目標を設定した。目標設定の考え方としては、大学等に進学した後、多分野において得た知識や技能を生かし地域産業等に貢献することは、地域活性化のために必要不可欠である。そのために高校での学習を通して、生徒の進路に対する意識の向上を図ることとしている。本年度は、大学等進学予定者23名のうち地域系の学部への進学を考えている生徒は2名の9%という結果となっている。その一方で、大学等進学後に将来出身地及び伊方町周辺への就職を希望している生徒は15名(65%)という結果となっている。それに加えて各種学校等進学者の中にも出身地等での就職を考えている生徒もおり、全体として高い数値となっている。高校3年間での地域連携活動や探究活動を通して、郷土への愛着が高まった結果ではないかと分析している。高校3年間での活動を大学での学びにつなげ、地域創生関係の大学・学部等への進学者数を増やすためにも、来年度は探究活動の在り方等を再検討していく必要があると感じた。現在、協働している大学等を含め、地域系の学部を有する大学との連携など新たな取組方法を検討していきたい。

三つ目として、「高等学校卒業後及び大学等卒業後の出身地への就業者数の割合70%」という目標を設定した。目標設定の考え方としては、地域活性化のためには、高卒人材の就職は必要不可欠である。また、大学等卒業後の「ブーメラン人材」は活力ある地域づくりに必要不可欠である。中期的な視点に立ち、地域を担う人材の育成を目指すこととしている。今年度は就業者数11名のうち、7名が出身者への就職が内定しており64%という結果となっている。来年度は、本校2年生及び伊方町出身の大学2年生を対象とした地元企業の合同説明会である「jobフェア in 三崎高校」の実施を計画している。また、生徒の興味・関心に合わせたインターンシップの在り方についても検討中である。これらの新たな取組を通して、変化の激しい社会に対応した新たなキャリア教育を推進していく必要があると感じた。

## 3 次年度以降の課題及び改善点

教育課程の編成や、探究活動の見直し、新たな組織づくりとその運営など、本事業の推進に際して新たな業務が増加した。これまでの業務に加えて新たな業務が積み重なるために、担当教職員にとっては大きな負担となった。また、その多くがこれまでに経験したことのない業務であったため、経験者からのサポートを受けにくいことも負担感を増大させる要因となった。本年度は、各部署での見直しや新規立案などが主な業務となった。来年度は、本年度立案した企画の実践が主な業務になっていくため、今年度に比べ事務的業務量の減少する一方、運営的分野での業務量の増加が予想される。事前に担当者間で十分な打ち合わせを行ったり、校務分掌や教科の枠を超えた連携を更に推進したりするためにも、綿密な計画を立て、担当者間で共有しながら各業務に当たること、少しでも負担感を減らすことができるように工夫していきたい。

本年度は、管理職や担当課長コーディネーターを中心としたコアメンバーで各業務の推進を行ってきた。そのため、コアメンバーとそれ以外の教職員で事業に関する意識の共有が図られていない場面もあった。そのため、年度末には大正大学浦崎太郎教授に来校してもらい、校内研修を実施することで意識の共有を図った。その後、浦崎教授にコンソーシアムメンバー対象の研修会も実施してもらうことで意識の共有の範囲を広げた。

来年度以降も適宜研修会を実施するとともに、校務支援システムなどを積極的に活用して全教職員の意識の共有を図りながら、本事業のスムーズな推進を行ってきたい。